

人文会ニュース

1991. 2

- 出版・流通・読者……………米子今井書店 永井伸和 1
- 情報化時代にこそ英知を
……………鳥取県立図書館 高多彬臣 5
- 驚き・肉声・深層
……………鳥取県立公文書館 浜崎洋三 9
- 人文書で、もうおともだち
……………定有堂 奈良敏行 13
- 山陰研修旅行報告……………弘報委員会 17
- 〔人文書講座22〕
- 思想・文化のペレストロイカ
……………桑野 隆 20
- 第九回特約店・準特約店の選定を終えて
……………特約店委員会 35

九世紀末までの主要な氏族名・人名を一冊に……
全項目に訓みを付けた最新の編集！
坂本太郎・平野邦雄監修
特別定価八〇〇〇円(税込)
(締切3年5月末日)

日本古代氏族人名辞典

大化前代から「六国史」の終わる仁和三年(八八七)までにあられる氏族名・人名から二八〇〇項目を収録。氏族名は、姓(カバネ)、発祥の由来、職掌、改姓の経緯、同族関係などを記述し、人名は生没年、父母、履歴、活動内容などを記述した。菊判／七六〇頁

吉川弘文館
東京都文京区本郷七一二
電話 三二六三一九五

●アバルトヘイト廃止をめざす国際協力出版

アバルトヘイトの 彼方に 日本人に何かできるか 人間が輝く

アバルトヘイト廃止をめざす南ア人民支援連帯基金編
南ア民衆の生の声を伝える現地レポート、ポスト・アバルトヘイトを展望する座談会、わかりやすい運動の手引など多様な内容を収録。A5判・1800円

大月書店 東京都文京区本郷2-11-9
電話03(3813)4651(代表)

歴史学研究会◎編集

日本同時代史

【全5巻】

各●¥2200

待望の本格的・総合的な戦後通史。

- 1 敗戦と占領
- 2 占領政策の転換と講和
- 3 五五年体制と安保闘争
- 4 高度成長の時代
- 5 転換期の世界と日本

青木書店 [価格税別]

東京都新宿区早稲田鶴巻町538(〒162)
電話03-3202-3999 FAX03-3204-1187

御茶の水書房

風のめぐみ

◎民族の復権を求めて!!

『アイヌ民族の文化と人権』

アイヌとしての自分史など差別と闘いつつ綴られた彼女の主張は私達に深い感動を与え、日本人の生き方に課題を提起

チカップ美恵子 著

A5変判 350頁 定価2472円

〒113 東京都文京区本郷5-30-20
☎03(5684)0751/振替東京8-14774

出版・流通・読者

——とっとり「本の国体」を始点として

米子今井書店 社長
鳥取富士書店

永井 伸和

山陰本線の鳥取駅を降りると、目の前に鳥取城跡を残す久松山が迫ってくる。本通りを真直ぐつき当り、この山を背に武家門をくぐると、昨年十月にオープンした、最新の設備を誇る鳥取県立図書館新館の景観がひろがる。オープン記念事業の一つとして、開館のちょうど翌日、山陰旅行中の人文会会員社と取次、そして地元読者、図

書館員、書店員によるシンポジウム「現代を考えるために、人文書は、何を提供できるのか」が開催された。版元から読者に至る人々が一堂に会して語り合ったこの集いは、県立図書館長の意欲と、地元定有堂店主の努力によって実現した企画であった。

一方、米子市立図書館の開館を祝って、第三回地方出

版文化功労賞の表彰式と記念の講演会が開催された。全国各地の地方出版のご苦労に賞を贈るもので、今回は秋田県の無明舎出版編『ブナが危ない』が受賞、次席は三浦佐久子著『壺中の天地を求めて』（栃木）、森岡雅子著『愛すべき酔払いに捧ぐ』（高知）だった。

十一月には、県立図書館で、鳥取県図書館協会の設立総会が開催された。協会は、公共図書館、学校図書館、大学図書館、さらに民間の文庫や個人まで交えて、図書館の振興をはかろうというもので、官・学・民の三者が揃った全県的な組織は、全国でも長野県に次いで二番目だという。

このような一連の図書館の催しに見る如く図書館後進県といわれ続けてきた鳥取県が、文化行政の中心に図書館を置き、市民の図書館を求める動きは、多くの課題を抱えながらも、今大きな流れになりつつある。

その一つ、「本の国体」として知られるブックインととり87「日本の出版文化展」への歩みと、その課題を振り返ってみよう。

「表垣文庫を始めましたので、本を借りに来て下さい」日曜日毎に、有線放送を通じて子供たちの声が聞えてく

る。昭和四十七年、結婚と同時に境港市表垣町に住んだ私達夫婦が地域の人々と共に、クリスマスイブに開いた表垣児童文庫も、いつの間にか十数年の歳月が流れた。

その間児童文庫の輪は県内に広がって、今や百を数える。文庫に集まる子供の本への欲求は、必然的に公共図書館への関心と要求となった。しかし昭和五十二年の境港市立図書館の誕生までは市立図書館は皆無で、県立鳥取、米子図書館とその分館が県内をカバーした半面、住民サービスの第一線にある市町村立図書館は育たなかった。この貧しい現実には、住民に密着した図書館づくりの運動を始めなければと、文庫のお母さんや青年たちが、「開かれた図書館づくりのシンポジウム」や、ブックフェアを開いてきた。

この運動の中で、鳥取県にはかつて、明治以来の中央からの官制の図書館づくりの傾向に対して、住民自身が自分たちの図書館を意識し、民主的な図書館づくりを進めてきた輝やかしい歴史があったことを知った。早くも明治時代には鳥取の遠藤薫、八橋の藤本重郎、境港の小泉憲貞の私立の文庫や、図書館の活動があり、遠藤たちの献身的な努力によって昭和六年、県立鳥取図書館が完

成、司書は日本十進分類法の発案者森清、館長は鳥取新報主筆であった河野寛治で、当時流行の「パリの屋根の下」をもじって「図書館の屋根の下」と呼ばれた文化サロンとなった。戦後も鳥取ガス児嶋会長を中心とした知識人の粘り強い図書館運動が続き、今再び、この鳥取県の伝統が地下水のように地表に現われたといえよう。

昭和五十八年、公共図書館や民間の図書館運動にかかわっている人々が「第一回鳥取県民読書週間連絡協議会」に集まって、読書週間行事の共同広報を行った。ともするとマンネリに墮してしまふ読書週間に魂を入れ、全国的な図書館サービスを共に考えようという訳である。

この協議会が昭和六十一年、県立図書館新設が決まった今こそ、市町村図書館の振興をと、再び「開かれた図書館づくりのシンポジウム」を開催した。滋賀県立図書館前川恒男館長の記念講演の後の討論の場で、地方から図書館や、読書、出版文化について問い直す読者の運動、それも国民体育大会のような県民あげての運動ができないかと、「本の国体」の提唱となった。

昭和六十二年秋、「地球はいま」をメインテーマに、図書館のテーマ別展示、各種講演会やシンポジウムと、

「本の国体」の県内三会場に、県人口の一割を超える六万七千人の人々が来場し賑わった。またNHK教育TVは、ETV8文化ジャーナルで特集「出版、流通、読者」とつとり「本の国体」をめぐって」を放映した。番組では、「本の国体」会場を訪れた市民の声に始まり、中小専門出版社、地方出版社、取次、図書館、地方の書店が、それぞれの立場で出版文化や流通にかかわる問題を語った。なかでも浦安市立図書館竹内紀吉館長が、この番組に登場されたことは願ってもない喜びであった。「人文会ニュース」48号（一九八七・五月）に寄せられた竹内館長の「中小出版社の在庫徹底収集の試み」を読み、専門書を買える図書館の役割の重要性を述べられているのに、大いに共感していたからである。図書館の竹内氏、書店の私の共感と同様に、東京の作家の立場からの日本文芸家協会の「文芸書の売れ行き不振を打開するための文芸書専門店構想」に、地方の読者の立場からの「本の国体」実行委員会は共鳴し、これを受けて会場内に「文学〈遊〉空間」という文芸書専門店の模擬店を設けた。米子市の今井書店文芸書専門店はその試みの延長に誕生したものである。「地方出版文化功労賞」も、東

京一極集中の出版流通に対して、地方と地方を出版物が結ぶ水路を切り拓き、人と文化の交流を積み重ねることが、今日の日本社会の課題であるという認識によって、「本の国体」開催を記念して制定されたものである。「本の国体」の課題の第一は、いうまでもなく図書館の振興と読書推進運動であるが、更に図書展示センター構想を提案している。国民体育大会が多くの体育施設を残したように、「本の国体」会場は大会後、県単位の常設図書展示センターとなって国会図書館への納本と同様、出版のつど出版社より一冊は提供される全出版物が展示され、中央と地方の情報格差を是正し、一冊の本との出会いを保障したいというものである。

足早に、「本の国体」の歩みを振り返ってみた。「地方が変わらなければ、全体も変わらない」と、日本一小さい鳥取県が提唱した「本の国体」は次なる県にリレーできぬままに三年間が過ぎた。それだけに、読者運動としての「本の国体」の理念を改めて考えてみたい。そんな時、平成元年は図書館元年ともいべき鳥取県で、この

度の人文会の集いがあったことを意義深く思う。

読者が一冊の本に出会う。その出会いの場に至るまでに、本は多くの無名の人々の手に支えられている。作者からはじまり、出版社、印刷所、取次、輸送会社、書店、図書館、そして読者。彼らはそれぞれの立場で自分の仕事をよりよい方向に向けようとしているはずである。それにもかかわらず、本を取りまく環境や、出版を全体的に捉えた場合、その構造は決して最良のものではない。それはなぜなのか。出版界を変えるのは、なにもその業界の人たちに限られるものではない。むしろ読者の一冊の本を求める切実な思いである。見方をかえれば、出版界、図書館界にたずさわる人たちも一個の読者である。それぞれの領域を越えて交流をはかり、著者から読者に至る多様なあり方を問うことである。今回の人文会の鳥取県立図書館でのシンポジウムは、短い時間ではあったが、そのことの意義と可能性を確認させていただいた。人文会にこのような試みを年に一度はと願う所以である。

情報化時代にこそ英知を

—— 今日における人文書の役割と公立図書館 ——

鳥取県立図書館長 高多彬臣

一九九〇年秋、私たちの図書館の新館発足にあたり、人文会の皆さんを迎え、「現代を考えるために人文書は何を提供できるか」というテーマで、地元の読者、書店、図書館、それぞれの立場で語り合うことができたのは、とても良い経験でした。このテーマは、地元で熱い志を持って書店を経営していて、この企画を持ち込んだNさ

んがその時紹介した、安江良介「仁と元——転換の時代に本を読む」からヒントを得たものであり、私自身の読書遍歴のテーマをあえて表現すれば、「この世界をどうとらえ、どう生きるか」ということに外ならなかったからです。

シンポジウムは仲々興味深いものでしたが、話の前提

としてすでに「人文書は今日、必要で大切だ」ということがあり、「人文書は何を提供できるか」というよりも、むしろ、どのようにしたら読者に人文書を提供できるのか、もっと平たく言えば、堅い本を読まなくなった読者層を開拓して、どのようにして、人文書売ることができるか、という点に話題が集中したように思います。しかし、考えてみると難しいから読まれないのではない。娯楽書や実用書のようにではありませんが、難しい科学書や先端技術の解説書はそれなりに、よく出ているし、要求もあるのです。

売行きが芳しくなく、図書館でも貸出しが少ないのは、いわゆる思想書、哲学書の類でしょう。この類の本が、この大衆文化の時代に多く読まれることは、もともと期待できないことであるかも知れません。いや、このような哲学的思索は、いつの時代でも時流に乗らなかつたと言うべきでしょう。それでは、何故、人文書が今日必要なのか、何を人文書から得ようとしているか、もう一度再確認したいと思います。

ソクラテスが今、出現したら

哲学の父、ソクラテス、彼はいつ、だれに会っても、いつも次のように言明することを止めなかつたと語っています。

「世にもすぐれた人よ。君はアテナイという知力においても武力においても最も評判の高い偉大なポリスの人でありながら、ただ金銭をできるだけ多く自分のものにしたいということにばかり気をつかつていて、恥ずかしくはないのか。評判や地位のことは気にしても思慮や真実のことは気にかけず、魂をできるだけすぐれたものにするということに気もつかわず心配もしないとは」(「ソクラテスの弁明」、田中美知太郎訳)

もし、彼が現代の日本に出現しても、この呼びかけは古代アテナイと同じように妥当するでしょう。そして彼はアテナイで誤解され、裁判の多数決で死刑になったように、現代日本でも、恐らく多数の支持を得ることはできないでしょう。

かつて私は、高校で倫理社会の授業を担当していた時生徒全員に「弁明」を購入させ教材として一緒に読んだことがあります。共通一次以前、倫理社会が入試と無関係の頃です。そして、こう問いかけてみたのです。

「もし、今、ソクラテスがこの町にあらわれて、真理、善美のことがらについて対話して探究する塾、というのを開設したとしよう。そしてコンピュータが使えるとか、英語や数学の問題が解けるとかいった効用はなく、その代りに、一体、それらの勉強が本当に、この世によく生きることに役立つか、一緒に吟味してみよう、と勧めたとする。君たちは、こんな塾に入学を希望するだろうか」と。大多数の生徒たちの答は否でした。ある生徒は、そんな事は実際、何の得にもならないからと答えました。そこで私は重ねて、「現在の戦争や飢餓、環境破壊は、産業技術が進歩しなかったから起っているのか、それとも、発達した産業技術が正しい目的のために使われていないから起ったのだろうか」と問いかけました。そして、問題がもし後者であるなら、正しい目的とか、正しい使い方とはどのようなものか、という問いに対する答えは、そうした産業技術の追求それ自身によって得られるだろうか、それとも、人間にとって正しいこと、善いこととは何か、というソクラテス的な問いによって得られるだろうかと質問を続けてみました。

私はこんな形で例の産婆術の一寸した真似事をやった

わけですが、考えてみれば人文書の役割は、基本的には、何か新しい情報を提供することではなくて、主体としての人間のあり方を問い直し、情報を判断する価値観や思考方法を形成してゆくガイドとなることのように思われます。それは知識や情報の伝達というより、むしろ知恵を育てることであるといつてよいでしょう。

学問の肝要なるものは

私は一九九〇年四月から、新しく発足した県立図書館に勤務し、洪水のように出版される本の中から選書を進めています。逐次刊行物のタイトル数も倍増し、今まで殆んどなかった映像録音資料や外国語文献の収集充実も今後の課題です。本県の文化情報センターとしての役割をいかに効果的に果してゆくか、前途に問題が山積しています。しかし私たち公立図書館の役割は単に情報のデータベースに止まってはなりません。

この鳥取県立図書館は、本県の障害児教育や女子教育の偉大な先達であった遠藤董先生が今から丁度百年前に創始された私立久松文庫にはじまりますが、私は最近、先生の旧蔵書をめぐるうち、古い和書に「学問の肝要な

るものは聖賢の道を学ぶにあり」という朱筆の書き込みを発見しました。地下書庫の一隅でこの文を見出した時、私は先生の生涯を貫かれた教育実践の根底にこの精神があったのかと一つの指針を与えられたように思いました。どんなに多くの知識や情報があっても、人間にとって大切な善美なるものへの倫理的自覚がなければ、学問は肝要なるものを欠いているのです。

人文書の出版と図書館の役割

そもそも人文書の源流にあたる宗教や哲学の古典の出版の事業は偉大な人格やその思想学問に接したものが、これを書物という形で遺し、さらに多くの人と分ち合いたいという願いから生れたものでしょう。図書館活動はそれらを選んで自分のものとし、人と本との出会いの場を作ることによって、人々の精神を開発し、豊かにし、ともによりよい社会を創りたいという先人の志に発しています。従って公立図書館は絶えず新しく豊富な情報を取り入れ、これを利用者に提供するとともに、変わらぬ人類の英知の源泉を保持しながら、今日の課題に対応する責任を持っています。

私は公立図書館が歴史的に民主主義の担い手としての市民を育てる場として設立されたことを再確認し、特に人文書について次のように努力したいと思います。

(一)公共の原理に立脚し、なるべく多くのすぐれた著作を購入し、良心的な出版文化を支えること。(二)時代の動向を見透したすぐれた書評と結び、利用者に積極的に良書を紹介するとともに、関連して講演会や読書会を企画し、潜在している市民の問題意識を掘りおこすこと。こうしてこの時代をともに生きているものとして互いの考えを深め合うこと。(三)学校の教師や学校図書館と協力し、生きる方向を求めている若い青年や子どもたちに働きかけること。私自身、敗戦後の中学生時代、吉野源三郎の「君たちはどう生きるか」にどんなに教えられ、励まされたことか。今、無気力を嘆かれる青年たちの内なる魂の飢えにどうしたら迫れるでしょうか。

最後に論語の「徳不孤、必有鄰」の言葉を想起します。乱世に仁を説く孔子は幾度も世に容れられぬ悲哀を味わいながらも、知己・同志の存在を信じました。私たちは、自らの仕事が誠実なものであるか否かを常に問いつつ、これを信じ、日々の歩みを進めたいと思います。

驚き・肉声・深層

—読者の現在と人文書

驚き

「高校生がほとんど読書をしない」という高校生非難の声を、昨年三月まで教員をしていて、学校内外でしばしば聞いた。そのたびに、その非難はむしろ大人に、とりわけ教員にこそ向けられるべきだと思った。

受験参考書・試験問題集・進学指導資料等が立て並べられた机上に、さらにワープロが我物顔に侵入してくる

鳥取県立公文書館次長

浜崎 洋三

という近年の職員室の様相変化は、私の眼には景観の殺伐化として映った。マニュアル本と事務機器のみが増加しているのである。目先の教育事務効率をあげるテクノロジーばかりが優先して「閉鎖的定常系」と化した校内では、イリイチの脱学校論に目を向けるものはほとんどなく、教育とは何かという原点を絶えず自問自答する姿勢すらも、多くの教員は失いつつある。開放性とダイナミズムを失い、職員室には無気力な「知の閉塞」ムード

が漂っている。

読書の楽しみを高校生に伝える重要な方法として、教員と生徒との「驚き」の共有がある、と私は思う。自己とは全く異質なものに触れたとき生じる素朴な驚きが、物事への関心の深まりの大きなきっかけとなる。堅苦しいとして、とかく敬遠されがちな思想・哲学など人文関係図書の読書の楽しみを生徒に伝えるには、教員自身の鮮烈な驚きをとまなう進行中の読書経験を語ることが基盤である。

しかし、「閉鎖的定常系」と化し、求心的傾向が支配的な校内では、読書世界であれ、「異界」と接触するところが忌避され、異界に飛び込むことは無論のこと、周縁人であろうとする勇氣さえも、教員の多くが失いつつある。新しい思想・哲学との驚きに満ちた邂逅の機会が、自らの閉鎖性の故に、断ち切られている。あるのは、事象の既成枠組による説明のくりかえしに過ぎない。クーンの「パラダイム・チェンジ」が話題になって久しいのに、大人の世界では日常的反復性が精神をも侵蝕している。「大人こそ読書をしていない」のである。

肉声

この数年来、鳥取市の書店「定有堂」の二階を会場にして、「〇〇新書を読む会」が月に一回開かれており、毎回十人前後の一般市民が集まる。私は、その座長と本指定の役割をつとめて来た。指定された〇〇書店刊行の新書版を読んで、各自自由に感想を語り合うというのが、会のはじめの趣旨であった。しかし、松田道雄・久野収などの近年の〇〇新書・ブックレットの内容は、若い人達には古色蒼然としていて不満が多い。「〇〇新書を読む会」と看板をあげてはいるものの、最近 hands 広く人文関係図書の新刊書を読む会となっている。

毎回のテクストの指定には、私の個人的恣意が作用することが多い。自分自身の「驚き」を伝えたいという欲望が勝手に動いて、周囲の人々には脈絡もないと思われるほどに、あれこれの分野に本を指定してしまう。私なりに、選定の筋道があるつもりだが。

思想・哲学書を選ぶとき、まず避けるのは、有名国立大学の学者教授の著作である。これらの、いわゆる学者タイプの哲学書では、西欧哲学の新動向の正確な紹介

その先哲古典との比較研究、論理的整合性などに熱心ではあるものの、術学的臭気が漂うのみで、肝心要の著者自身の肉声、思索営為の過程で呻吟する肉声が響いてこないものである。(ただし、坂部恵のものは例外)アカデミズムの美名の庇護の下での学者さんの哲学書には、閉鎖的「専門界」での評判を顧慮するあまりに、「他者」への能動的語りかけが欠けている。

「日常の言語から遠のいた哲学は決して幸福な哲学ではない。……日本語をもって思索する哲学者よ、生まれいでよ」と、和辻哲郎が記してから、既に半世紀以上の時が過ぎる。現在、坂部恵の一連の著作が、その要請にこたえつつあるように、私は思う。外国語のカタカナ表記、翻訳調まる出しの漢字造成語の多さが目立つ哲学書の中で、坂部の著作は異彩を放つ。坂部の哲学を、私は「ひらがな哲学」と呼びたい。豊富な言語論的考察を踏まえて、西欧起源の哲学と日常的日本語世界という、二つの異界を結びつける真剣な努力がなされつつある「ひらがな哲学」の今後の展開に注目したい。

「新書を読む会」では、在野の思想家・評論家の書物を意識的にテキストとして選定している。内山節の労働

論、田原八郎の超人論、今村仁司の仕事論、柄谷行人の他者論、竹田青嗣の現象学などが、この二年間に主な思想書としてテキストにとりあげたものである。「新書を読む会」のメンバーは、一回ごとに顔ぶれは約三分の一ぐらいいがわるる上に、思想構築を専門的にこころざすものでもなく、あくまで平均的な市民層であるから、読んでもおもしろかったか、自分の身近の状況にひきつけて読めば何が参考になるか、これまでの自分の考え方にとって異質的なショックとなるものがあつたか等々、とにかく自由に感想を話し合うことにしている。話し合いの席で私が積極的に発言するのは、参考になる著書と著者名についてのコメントぐらいである。参考著書には、できるだけ新刊書と日本人著作をあげるようにし、偉大な古典と称されるもの、翻訳本を避けるようにしている。教養主義的な読書のあり方、平均的日本人の日常生活から遊離した論理思考は、私自身が嫌いだからである。

とにかく、著者自身の現情況との葛藤、思想構築過程の苦吟が伝わってくるものがテキストとして望ましい。前記の著者では、竹田青嗣のものを扱ったとき、会員の議論が最も白熱した。竹田の文章表現力だけではなく、

彼の現象学にかける熱意が、会員を感動させたと思われる。

深層

東欧世界の激動、イラクのクウェート進攻など、世界情勢には大きな変化が訪れつつあるが、その深層の意味を探ろうともせず、ありきたりの既成パラダイムによる解説で納得しようとするものが、あまりにも多い。事象表面の情報獲得のみに追われ、深層意味の原理的理解への努力に欠けている。イスラム世界への問題対応として、「新書を読む会」では昨年井筒俊彦と五十嵐一の本をとりあげた。井筒の神秘哲学・言語論、五十嵐の文化摩擦論を通じてイスラム世界に触れることにより、会員の知の深層をゆり動かし、ディオニソス的知のダイナミズムを喚起しようと考えたからである。

会の昨年のテキストのもう一つの柱は、ユング心理学関係であった。周囲事象の深層意味を探ろうとする一方で、自己の深層意識への目覚めも持ちたいと考えたから

である。岩波同時代ライブラリーのストーリー『ユング』は恰好の入門手引書となるテキストであった。ユングは「人間はさまざまな人格を生きる」と説く。「新書を読む会」の本選定は分裂症的だと酷評されることが時折あるが、人文図書の見書対象は広い射程の下にあるべきだし、異端、異質なものを排除すべきではないと信じる。読書経験でも、ユングのいう「統合」の中にこそ成長があるといえよう。科学的生産力中心主義と素朴な保守的自然保護主義、経済的合理主義とオカルティズム、という風に単純な両極に分解することなく、分裂的な危機の中で、あやうい平衡を保ちつつ「人格統合」をめざす読書姿勢が必要なのであろう。

今年度の会でも、目幸黙僊のユング宗教学、河合隼雄のグレート・マザー論、湯浅泰雄の「氣」論などを引きつづけてとりあげたいと考えている。

結局は、五十歳代半ばに達した私が、吉本隆明のいう「還相の視点」、十牛図の第十図境地の意味に、ようやくにして気付きはじめたといえるのかもしれない。

人文書で、もうおともだち

鳥取市 定有堂書店主人

奈良 敏行

せんだって、人文会二十一社取次三社と当地鳥取県立図書館との共催を軸にした研修シンポジウムがとり行なわれ、地元の一書店として参加させていただきました。人文書とのつながりが、地方の一小書店として、どのように試行錯誤できるかとの課題で、更に自分なりに考える機会をいただきました。

自分でも判然とはしないのですが、人文書は偏執的に好きです。新文化の「出版流通インフォメーション」には、自店紹介を、「品揃えのコンセプトは、総合でなく統合、どれでもあるのではなく、何でもある。人文書とくせのあるコミックの狭間に揺れる、知的な遊人へ向けた、トータルファクションとして考えてます。」と寄せ

てます。五十坪の小書店で、人文書を核としてみたいとのこだわりは、志という程自明なものではないのですが、暗黒な執着という程のものではあるかも知れません。

当然の事ですが、書店の現場には本があるだけです。人文書という良い本が、前駆的にあるのでもなく、ジャンルをはずして、単にただ本があるだけです。人文書というものを実体的に考えてしまえば、この権威主義の向こうでは、人文会すら一圧力団体と化してしまっているではないでしょう。

書店はなりわいである以上、業に過ぎませんが、事業というには宿命的に虚弱な気がします。扱う商品の特性によるのでしょうか、業として本気になりすぎると裏切られるような気がします。文化財であると同時に消費財でもある「本」というわがままな商品に付き合うには、一度何らかの自己放下を通過する必要が不可欠なようです。そう割り切ると、このなりわいは総力を上げてさしちがえる甲斐が十二分にありそうです。

人文会二十周年を記念した出版物、『人文科学の現在』には、「人文書は専門書のなかでは、もっとも集客率の高いものです。それは人間形成の基本が人文書にあるか

らです。」とうたってあります。業を踏まえ、業を超える志がうかがえてうれしいです。

書店は総力を投じて営む他はないと述べましたが、「本」の文化財と消費財という価値の二面性に応じて、本屋もそれをなぞる他ないという想いが強くします。総力という意味は、本屋はスペースのみの延長、展開ではその役割を完結しえないという確信です。

人間形成の基本は、一人孤立して本を読むだけでなく、その自己修練を踏まえて人と交わる事だと思えます。であるならば、書店もスペースで完結するのみでなく、書物が、人と人とを交わらせるべくしてあるものならば、書店もスペースを超えて、人と人の中に役割を見出して行くべきものではないかと考えます。その了解を称して総力的であると思うのです。書店は、「書物」という「物」を売るのだけでも、人と人とのつながりの中で生きて行くしかない、という前駆的確信は、人文書という、「特性化」された本の世界を前面に据える事で、具体的に現実化できそうです。

定有堂は、業を超えたところで、或は業を全うしたところで、スペースの枠を超える、という課題を追求して

きました。人文書を基軸とするといっても、現実的な売場面積という限界はどうしようもない枠として立ちふさがります。しかし、この限界は本当は限界でなく境界に過ぎません。境界を超えるには、スペースを何らかの形で超えればいいわけです。

先日、『日販通信』の十月読書週間特集号で、地域文化の〈核〉となる書店という企画で、定有堂の紹介にあずかったのですが、その中で、「書店というのは人と人とのつながりでできている。つながりをつくっていくことが自分の仕事なんだ。人と人とのつながりがキチンとしていれば、どんな商いでもできていく」と、定有堂の暗黙な試行錯誤を言語化していただきました。そうか、人と人とのつながりが基本なんだナ、と改めて認識させていただいたものです。

定有堂は、スペースを超えた人と人とのつながりの試みとして、「心理学講座」「岩波新書を読む会」「シネクラブ・ティユウ」「英会話」等々のサークルを合わせ持ち、定有堂教室と称して、活動しています。鳥取大学教授とか、NHK鳥取放送局のディレクターや、外人講師など手弁当で引きうけて下さり、市井の塾としては、高

い水準を維持していると思います。

例えば、「心理学講座」のキャッチフレーズは、「心理学で、もうおともだち」です。半ば冗談なのですが、大切なのは「おともだち」です。学問は一つの「きっかけ」であれば、それでいいわけですし、「主題」は何よりもおともだちです。それは、お互いの観念性でつながれる必要があるという事です。

お互いの孤独と観念性を不可欠なものとして生きている人たちが、それでも何らかの形でつながろうとしたら、それは言葉によってつながる他はないという気がします。

もし、一書店が、こだわりという形で人文書とつながろうとしたら、半ば冗談のようにして述べるおともだち主義ですが、当然の帰趨のようにも思えます。

こうした延長上に、うれしい事に、定有堂教室に関わる人たちを中心として、「定有堂ジャーナル」という月刊の書評小冊子を刊行（無料）しつつけている事です。一人一人の孤立した観念性が、うまく言葉で出会えてい

いナ、とワクワクしつつづけています。

書店の現場では、読者と本との出会いがあるだけで、

分類、ジャンルはゆるやかなものです。むしろ境界に魅力があるとすら言えそうです。人間形成の基本に關与する、という一点に並びかえて人文書を考えれば、さらにこの境界は多様です。この現場で、そうした人文書についての「情報」と言えば、何をおいても、井狩春男さんの「まるすニュース」(鈴木書店)だと思います。人文書をゆるやかに、多様に考えれば、あるいは書店の現場性で考えれば、「まるすニュース」がいつもすくい上げつづけている領域に、私たちの読者の現在がある、とすら信じています。

「まるすニュース」は、単なる情報の選送ではなく、ここに読者の現在がある、という信念においてすばらしいと思つてます。だから、本の情報紙でなく、書店の輪郭を形成するための「通信教育」として受容しています。そういうファン心理で、自分でかってに井狩さんに師事しているのですが、一年前の「定有堂ジャーナル」の創刊に際し、巻頭の連載をいただけるといふ果報にめぐり合いました。(そう言えば、書評小冊子を交流の場として大切にする、というのも井狩さんにいただいたヒント

でした。)鳥取の読者は幸せです。

研修シンポジウムで、未来社の西谷能英さんが、自社の社会科学書、人文書は、たかだか一、三千の読者をきっちりと見据えるところで出版活動を成立させ、自立させているし、その事こそが肝要なのだ、と強調されたのが、強く印象に残っています。

それがすべてとは言えませんが、出版社には必ず潜在的であれ共感する読者がいます。PR誌、新刊ニュースなどが、親密なつながりを暖めつづけています。書店に出来るのはこのつながりをできるだけきっちり生み出し、冷さないように持続することだと思ひます。

書店は、本を並べるだけです。並べるだけです。出版社が、身体的存在としては、どこまでも社会内存在でしかなく、にもかかわらず頭だけは無限界の、身体的境界を持たない、それは身体的でない故に無境界なのです。が、学者との付き合いを基軸とするのに反して、どこまでも肉体的境界の内にある、生きた肉体を抜きにできない知性とながるという面で、何事かだと思ひます。いずれにせよ、本屋でよかったナ、と思ひます。

山陰研修旅行報告

弘報委員会

青い海に続く白い砂浜。鳥取砂丘を眼下にして、いよ

いよスタートする人文会研修旅行。今年の研修旅行は山

陰地区を訪問致しました。今回は、東京出版販売の金田

取締役書籍部長、日本出版販売の阿部取締役書籍仕入部

長と鈴木書店の小泉取締役仕入部長にご同行いただき、

総勢二四名で十月二日出発致しました。

人文会の研修旅行は厳しい日程の連続で有名ですが、

今回は比較的余裕がありました。

日程は次の通りです。

*

*

(十月二日) 鳥取・富士書店、定有堂書店、鳥取県立図

書館

米子・今井書店皆生通店、文芸書専門店、

今井書店本通店

(十月三日) 松江・今井書店本店、今井書店西津田店、

千鳥書房、園山書店大学前店、今井

書店学園通り店

(十月四日) 山口・文栄堂本店、文栄堂山大前店

研修旅行の目的は、書店様の棚を拝見して店長様や担当者の方と意見交換を行い人文書販売の協力体制を築いて行くことです。今回も訪問させて頂きました書店様には、お忙しいところご協力頂きましてありがとうございます。

さて、鳥取空港に到着したのは午前九時、開店前のひとときを鳥取砂丘を散策して、自然の偉大さに改めて感動した一同でした。鳥取市で訪問させて頂いたのは、富士書店様と定有堂書店様。それぞれ個性ある店作りで頑張っていました。

鳥取県立図書館は十月一日開館で、その翌日に見学させて頂きました。新しいシステムと明るい館内が県民の憩いの場となる事でしょう。館内を一巡した後にシンポジウム「現代を考えるために人文書は何を提供できるか」を高多館長様の進行で行いました。読者代表として各新聞社の方々や公文書館の方、書店様にもご参加頂きました。会員社側からは、「自社の出版物を中心に読者に何を訴えていくか」と人文書の製作、広告、配本の問題が

提起され、読者側からは書店に欲しい本がない事や、手元に入るまでの時間が掛かる事等の要望、書店様からは地域で沢山の問題を抱えながら色々な試みを行っている事等、短い時間でしたが充実した研修会でした。

米子市では今井書店様の各店を訪問させて頂きました。特に文芸書専門店ユニークな店で会員社の関心をひいた様子でした。

翌日は足立美術館を見学した後、松江市の今井書店西津田店様と今井書店本店を訪問し、店内を拝見しました。千鳥書房様、今井書店学園通り店様、園山書店大学前店様、それぞれ異なったタイプの店で健闘されていました。山口市では、文栄堂書店様の本店、山大前店を訪問させて頂きました。

それぞれのお店で店長様、人文書のご担当、外商のご担当の皆様と懇談会を開かせて頂きました。貴重なご意見を賜わり、大変参考になりました。特に山口文栄堂の新山社長様の「キツネや狸に本が売れたら」のお言葉には人口の少ない地方都市での書籍販売の難しさが実感として伝わってきました。会員社の今後の営業活動に活かしていきたいと思います。



グレン・グールド 著作集

1・2

異端を恐れず音楽を生きたグールドのエッセイ集成
ピアノの鬼才は、また卓抜な批評家でもあった。自らの演奏経験と深夜の思索から生まれた独自の音楽観で、パツハから現代音楽までを縦横に語り、聴衆とメディアの未来を論じる。これまで断片的にしか知られていなかった挑発的言動の全貌を、初めて明らかにする決定版文集
総七二〇頁。ティム・ペイジ編 野水瑞穂訳 各四二〇元

山陰の魅力は自然と人情の美しさ、そして歴史・神話の豊かな地であることです。新鮮な自然の代表は大山国立公園。その雄大さと荘厳さは、他の山岳地と比しても遜色ない三瓶国立公園は、ほぼ四周に平原をもって、山容もなだらか、女性的優美さをもっています。温泉の多いのも特色の一つでしょう。城崎、三朝、皆生、玉造をはじめ約二十の湯が湧出し、特に海に近い温泉が多いのも有名。神話の源となるのが出雲。出雲大社は山陰観光の一拠点となっています。観光地として有名な萩、津和野等も歴史の町。町の隅々に歴史の香りを残しています。最終日には、締め括りとして津和野や萩の旧蹟、神社

を訪ねて歴史の研修を深めました。

今回訪問させて頂いた特約店、準特約店の書店様、鳥取県立図書館の皆様には厚く御礼申し上げます。ご提案頂きました流通問題、新刊の配本、情報の伝達等、各会員社共いろいろと研究していかなければなりません。今号のニュースには今井書店の永井社長様、定有堂書店の奈良様、鳥取県立図書館の高多館長様、公文書館の浜崎次長様には、ご執筆頂きましてありがとうございました。他の方にもお書き頂く予定でしたが誌面の都合で、次の機会にお願い致したいと存じます。今後も人文書の販売に力をお貸し頂きます様お願い致します。

死を前にした人間

中世から現代まで、約一千年にわたる死の迎え方、死後の観念、葬送と墓、追慕の仕方などを考察する「死の心性史」。自然なもの、憎むべきもの、常に備えるべきもの、憧れるものへと相貌を変えてきた死は、現代の我々にどんな姿であらわれているのか？ 待望の邦訳。六八〇円

成瀬駒男訳



東京文京本郷
3丁目17-15

みすず書房

思想・文化のペレストロイカ

桑野 隆

1

ソ連が変わりはじめて何年が過ぎたことになるのだろうか。一九八五年三月のゴルバチョフ政権誕生から数えるとすれば、すでに六年近くが経ったことになる。その間にたしかにソ連は変わったし、いまなお揺れ動いている。「ソ連はどこまで変わるか」といった類の特集はま

だまだ可能に思われる。けれども他方では、もしかするとソ連は変わらないのではないか、いや変われないのではないかと思いはじめたひとつも、しだいにふえてきているようだ。はたしていずれが的を射たものであるか、明快な答はわたしにはない。不安と期待が入り混じった気持ちで見つめているというのが、正直なところだ。

しかしひとつだけ確かなことがある。それは、昨今の

ソ連が——日本のマスコミ等からも窺えるように——危機的状況にあるということだ。一九九〇年二月九日付の『モスクワ・ニュース』紙に掲載されたアンケート結果も、第一の問いは「ソ連はいつ危機から抜けだすと考えますか」となっている。答は以下のとおりである。

「この一年 一％／この二年、三年 八％／この五、六年 一五％／西暦二千年近く 一六％／それ以上 三三％／決して抜けだせない 一二％／保留 一六％」。

ちなみにこのアンケート結果によれば、この冬に不安を抱いているひとは六一％であるのに対して、期待を抱いているひとは一五％である。また、今後半年に経済状態の安定がはじまるとするひとは一七％、はじまらないとするひとは六五％であり、ストライキの波が訪れるとするひとは五八％にのぼっている。さらには、ソ連邦の解体が起こるとするひとは四四％いる。総じて、期待よりも不安のほうが格段に勝っていることがわかる。

こういった結果を見ると、傍から見ているわたしたちのソ連認識も、そう誤ったものではないかに思えてこよう。しかし問題は、だから今後どうするかである。この点に関しては、日本のマスコミなどからすると、ソ連の

人びとはいまやこぞって資本主義化に救いを求めているかに見えかねないが、実際には、ことはさほど簡単ではなさそうである。おなじ『モスクワ・ニュース』の九〇年一月四日号に掲載された、一九一七年の十月革命に関するアンケート結果を、例に引いてみよう。

まず「十月革命が国内の諸民族に何をもたらしたか」については、次のように答えている。「歴史に新しい時代を切り開いた 二二％／社会的・経済的発達を推進した 二三％／発達にブレーキをかけた 二一％／破局となった 一六％／保留 一八％」。また、「眼前で革命が生じているとすれば、どうしますか」については、こうである。「積極的にポリシェヴィキを支援する 二二％／何かでポリシェヴィキに協力する 二二％／事件に関与せず、通り過ぎるのを待つ 一三％／ポリシェヴィキに反対して闘う 六％／外国に逃げる 一〇％／その他 二％／保留 二六％」。そのほか、レーニンに共感を抱く者は六四％、反感を抱く者は八％、ポリシェヴィキが立てていた目的の達成に革命が必要であったか否かについては、必要であったとする者四六％、必要なかったとする者三二％である。さらには、他の党の新聞の開

鎖を必要であったとする者二一%、私有財産の国有化を必要であったとする者二四%である。

むろん、このようなアンケート結果はほんの一例ではない。しかしここからもある程度窺えるように、ソ連の人びとのあいだにあっては、経済・政治状況の厳しさに対する認識についてはかなりの一致を見ているにもかかわらず、革命やそれに関係した歴史に対する評価となると思った以上に多様なのである。ややもすると、ソ連の人びとは革命崇拜一辺倒から今度は一転して革命批判に一斉になびいていったかのように受けとられがちであるが、実際には事情はもっと複雑であることが、ここでも示されている。すなわち、一枚岩状況から別の一枚岩状況に転じたのではなく、内的にきわめて複雑で多様化してきたのが、いまのソ連なのである。こういった多様化、それもすさまじい多様化こそが、ここ数年のソ連においてもっとも変わった点としてあげられよう。

2

話を文化・思想面にしぼるならば、グラスノスチ（公

開性——声をだすこと）政策下のソ連では、国内の作家、芸術家、思想家等が自由に発言し、活発に議論を戦わすようになっただけでなく、国外にあった者、さらには歴史上もっぱら否定的にのみ位置づけられていた者たちが相次いで「復権」してきた。これによって、ソ連の文化界は俄然厚みをとるもどしたといえる。

なかでも目だつのは文学界の動きである。ラスプーチン、アイトマトフのように大統領会議のメンバーに加わる作家や、リハチョフ、イヴァノフ、アヴェリンツェフ等のように人民代議員にえらばれる文学研究者もあらわれる一方、ソルジェニーツィン、プロツキイといったノーベル賞作家を初め、ナボコフ、ヴォイノヴィチその他のような国外にあった多くの作家が見直され、その作品が出版された。また、バステルナークの『ドクトル・ジバゴ』、ザミャチンの『われら』、プラトノフの『チェヴエンгур』、ブルガーコフの『犬の心臓』、アフマトヴァの『レクイエム』のような、国内では発禁状態にあった作品が出版されるようになった。それ以外にもベールイ、マンデリシュタム、ツヴェターエヴァ、ホダセヴィチ等のように、不当な冷遇が終わり再評価さ

れるようになった作家、作品の名は、枚挙にいとまがない。外国文学に関しても同様であり、たとえばオーウェルの『一九八四年』、『動物農場』のようなアンチ・ユートピア小説が、ザミヤーチンの『われら』、チャヤノフの『農民ユートピア国旅行記』などとも関係づけながら、公刊されている。

このあたりの勢いは、専門家たちの予想をもののみごとくに裏切ってしまった。最初の数年間は、こういった作家や作品が出て、「それでも○○だけは出ないであろう」と高をくくって予想しつづける専門家もいた。たとえば、まさかと思っていたソルジェニーツィンの『イワン・デニソヴィチの一日』が出ると、今度は『収容所群島』は絶対に出来ないと言う。あるいは、スターリン批判の作品は許されても、グロスマンの『万物は流転する……』のようなレーニン批判の作品は許されまい、と言うのである。ところが実際にはどれもあつてなく出てしまい、専門家も最近ではさすがに予想を控え気味である。もはや、社会主義リアリズムなるものを一枚看板に掲げていた時代はほぼ完全に去ったわけであり、本格的な社会主義リアリズム批判をいち早く著わしていたシ

ニャフスキイの著作集も昨年ソ連で出版されている。

また、演劇界を見ると、たとえばここ三〇年余のソ連では最高の演出家とされるリュビモフが母国ソ連に自由に入り可能となる一方、二〇世紀を代表する前衛演出家のひとりメイエルホリドが一九四〇年に肅清された際の残酷な「事実」関係も明らかにされた。小劇団が一挙に潰されたのも、きわだった現象に数えられよう。異国の地で生を終えたタルコフスキイの映画も上演され、タルコフスキイをめぐる論集も出るようになった。音楽では、亡命中のロストロポーヴィチの帰国公演が実現した。「非公式に」歌われ聞かれてきたヴィソツキイやオクジャワの歌も表に出たどころか、いまではおおっぴらな反体制ロックにも事欠かない。

思想の分野でも、これまで排斥されていた者たちの再評価がめざましく、最近ではベルジャーエフをはじめとする道標派への注目が目を惹く。政治家としてはなんといいってもブハーリン、そしていままさに「復権」せんとするトロツキイが、代表的な人物としてあげられよう。

活況を呈するこういった状況を、前世紀末から今世紀二〇年代前半にかけての「ロシア・ルネッサンス」にな

ぞらえる者もあるくらいである。こういった文化の自由化と復元はいましばらくづいてゆくであろうが、その一方ではこのところ、もはや一時ほどの賑いぶりは去ったかに見えないでもない。むろんいまはまだ材料をだしはじめたにすぎず、本格的な検討作業はむしろこれから課題なのであるが（実際、新しい材料が出た途端に激しい論争が起こることもまれではない）、大まかにはまず一段階が終わったといえそうである。その意味では、現在までの動きをひとまず振り返りみるのもあながち尚早ではないであろう。それにしても、前記のように今日のソ連の人びとの歴史観、社会観はきわめて多様化しており、文化・思想界もそれに劣らず、あるいはむしろそれ以上に多様化しているのが実情であって、表面的にせよ全体を概観するなどとうてい不可能である。以下でとりあげるのも、結局は、わたし自身の射程内に入ってきた幾つかの動きに限られることになるう。

3

まずは思想界の動きである。

ご承知のように、ロシアの思想史にしばしば適用される対立図式にスラヴ派対西欧派というものがある。反西欧・反合理主義・反近代のスラヴ派対西欧市民社会を範とする西欧派といったこの図式は、一八四〇、五〇年代の論争に端を発するものであるが、前記のように多様化がいちじるしい今日の状況に適用するにはあまりに大まかすぎると思われるのが普通であろう。にもかかわらず、いまもってこの図式は多くの者に重宝されている。その是非はさておき、重要なのは、現場においてこの対立図式をもちだしてくるのはもっぱらスラヴ派の側であるということである。かれらはあらゆる害悪を西欧志向に帰す。ある者は、ペレストロイカがうまくいかないのは西欧派のせいであると言い、またある者は、ペレストロイカそのものが西欧派によるものであると批判する。さらにはまた、そもそもロシア革命じたいが西欧派によるロシア史の断絶であったとまで非難する者もいる。

他方、「西欧派」よばわりされる者たちは、政治的には、市民社会の成熟こそソ連に不可欠であると考え自由主義とブルジョアリズムの導入を唱える点ではほぼ共通しているものの、細部になるとスラヴ派にくらべてはか

に多様である。もっとも、それらの考えの多くはわたしたちに比較的なじみ深いものであり、ここではその思想じたいを特別にとりあげることは省きたい。

「西欧派」との関連でいえば、むしろ目を惹くのは、それまで閉ざされていた西欧の学者、思想家の精力的な紹介である。ここ五、六〇年細々と、それも否定的にしか紹介されてこなかったニーチェ、フロイト、ハイデガー、オルテガ・イ・ガセット、ヴェイトゲンシュタイン、ガダマー等々が雑誌掲載や単行本のかたちで相次いで公開されてきている。マルクス主義に関しても同様であり、マルクーゼ、フロムのようなフランクフルト学派やその他の流派についても、翻訳紹介がはじまっている。こうして、長きにわたる思想的鎖国状態を一挙に埋めようというわけである。もちろん、個々の思想に対する評価はさまざまではあるが、西欧にまなびつつ、みずからの思想を組み立てなおそうとする姿勢はかなり共通している。当然のことながら、「西欧派」は、自分たちロシア・ソ連の文化や思想をも、西欧と照らし合わせることににより相対化、一般化していこうとする傾向が強い。

こういった動きに反発するスラヴ派のなかにもさまざま

まな傾向が存在する。おそらく、復古派の代表格としてわたしたちにもっともよく知られているのはアメリカ在住の作家ソルジェニーツィンであろう。社会主義イデオロギーのみならず西欧の民主主義、自由主義イデオロギーをもふくめた進歩的イデオロギー全般に対して反発し、革命前ロシアにあこがれ、教会をはじめとする民族の伝統を重視する姿勢は、最近ソ連の新聞に掲載された長大な論文「甦れ、わがロシアよ」でも判然としている。

復古派は当のソ連でもますます目だってきている。ペレストロイカの成果がいつこうに見えてこないなかで、かれらは勢いをましたかのようにである。たとえばゴージノフ。ロシア・ナシヨナリズムの色彩を濃くうちだしたこの文芸評論家は、ソ連では「ナシヨナリズム」を堂々と云々しづらい状況が延々とつづいていたことを強調すると同時に、「ロシア嫌い^{ロシヤイハイ}」なるものの系譜を遡ることによって、「抑圧された」ロシア人の不幸な運命を託っている。これほど鮮明ではないにしても、「農村派」の作家たち、つまりラスプーチン、アスターフィエフ、ベローフその他も復古的であり、ナシヨナリズムを重視する傾向にある。ラスプーチンなどのように、日本では、

「バイカル湖を守れ」といったようなもっぱらエコロジー的視点で知られるかれらではあるが、かれらのいうエコロジーは、「西欧派」にも見られるエコロジスト、さらにはまた日本におけるエコロジストの多くとは異なり、相当に復古的な立場に立っており、危ういロシア・ナシヨナリズムに陥っているらしいすらある。

ちなみに、エコロジーはペレストロイカがはじまる前後から目だちはじめた現象であり、環境保全の名のもとに知識人が立ち上がり、シベリアの河川の逆流計画を阻止するなどの成果をあげるとともに、ソ連ではそれまでなかったような下からの住民運動を呼び起こした点でも、画期的なものであった。また、エコロジストのなかには、中世ロシア文学者リハチョフのように、たんに「生物学的エコロジー」だけでなく、それと同時に「文化のエコロジー」、「精神のエコロジー」の必要性を説く者もいる。自然だけでなく、文化遺産、さらには精神的な伝統までも重視すべきというわけである。もっとも、こういった「文化の記憶」^{ペーミヤチ}の重視には両面価値的なところがあり、その一面だけを受けとられた場合には、すこぶる危険なヘーミヤチ（記憶）グループの反ユダヤ主義にすら

つながりかねない。リハチョフ当人は、ロシアの文化的伝統を重視するとはいえ、同時にその立場が独自の対話論に裏づけられていることを忘れてはなるまい。

おそらく、今日のソ連では、このリハチョフとイヴァノフ、アヴェリンツェフが、心ある知識人のあいだで人望を集める代表的な学者としてあげられよう。言語学、記号論、文芸評論にたずさわるイヴァノフが「西欧派」的色彩が濃いのに対して、ビザンチン文学を中心とした文芸学者であるアヴェリンツェフはより「スラヴ派」的である。にもかかわらず、両者が以前から高次のレヴェルで互いを認め合ってきたのも、元来がリハチョフ同様に、既成の窮屈な対立構図に収まるような人物ではないことによる。

ところで、前記のように、いまやソ連ではあらゆる主義、思想、理論が飛び交っているわけであるが、それまで抑えられたり冷遇されていたのは、非マルクス主義者だけではない。マルクス主義者にしても同様であった。公式マルクス・レーニン主義なるものは、西欧マルクス主義を非難しつづけただけでなく、国内のトロツキイ、ブハーリン等の「異端」をも完全に抹殺してきた。とこ

ろが、ソ連でもようやくかれらの著作その他が手に入りはじめ、マルクス主義もまた多様化しつつある。ことに、スターリニズムをマルクス主義の側からいちはいはやく的確に批判していたトロツキイの著作がある程度出そろった暁にどのような影響が生じるかは、興味深い。またすでに、新しいマルクス主義運動はさまざまなかたちで起こってきており、たとえば、一九五八年生まれのカガルリツキイなどはその辺の代表的人物のひとりにあげられよう。『考える章』を初めすでに三冊の著書を西欧でだし、モスクワ人民戦線の中心的メンバーとして活躍しているカガルリツキイがめざす「資本主義に対する民主主義的なオルタナティブとしての社会主義」は、困難な状況を十二分に認識したうえで、なおかつ真の民主主義を問うたものだけに、注目されてしかるべきであろう。

このカガルリツキイによれば、バフチンの理論・思想として、当人はマルクス主義者ではなかったにもかかわらずマルクス主義の豊饒化に役立ちうる。この二〇世紀ロシア最大の思想家バフチンの評価をめぐっては、昨今、ソ連でもかなり分かればじめてきている。とくに注目されるのは、バフチンはマルクス主義、フォルマリズム、

記号論、構造主義、ポスト構造主義、実存主義、ロシア・アヴァンギャルドなどのいづれとも関係ないばかりか、〈カーニヴァル〉や〈ポリフォニー〉を云々している者にはおそらくバフチンは理解できないであろうとする見方である。アヴェリンツェフ等のこういうった見方に近い前記のコージノフは、バフチンとベルジャーエフとの共通性を強調している。

この道標派やソロヴィヨフの復活もまた、最近の注目すべき現象である。一九世紀以来のロシアの反体制運動の伝統を批判した有名な論集『道標』（一九〇九）が昨年復刻されたほか、おなじ執筆陣による革命批判『深き淵より』（一九一八）の復刻も予定されている。かつてマルクス主義を奉じ、やがて反マルクス主義者に転じたベルジャーエフらは、「イデオロギー」よりも「真理」を重視する立場にたち、革命的インテリゲンツィヤの世界観を批判し、宗教や精神的なるものの価値を強調した。長らく反革命思想の代表のひとつにされてきた道標派の復権は、現在の知識人の思いに深いところで呼応しているのかもしれない。

つぎに、文学・芸術の動向であるが、この点に関しては、思想面にくらべると新聞雑誌等を通して、あるいはまた来日公演などによってもその都度かなり伝わっているといえよう。もっとも、前記のように一時にあまり多くの現象が起こったために、本格的な紹介となると、まだまだ不十分であることは否めない。

たとえば、ロシア・ソ連の文学がおもしろくなったというわりには日本語でほとんど読めないという状況がある。これには、ペレストロイカのなかで書かれた作品にまだ見るべきものが少ないという事情も関係しているが、ペレストロイカのなかで浮上してきた前記の作家や作品にしても翻訳が立ち遅れている。翻訳されているもののも代表作としては、内戦状態下の一九九三年のモスクワを描いたカバコフの近未来小説『ノリターン』（一九八九、および二〇年ほど前に書かれていたスターリニズム批判として話題になった、ルイバコフの『アルバート街の子供たち』やベックの『左遷』があげられよう。

いったいに、ソ連の文学はいまや一大転換期を迎えて

いるともいえない。ロシアでは一九世紀以来もっぱら文学が時の権力や社会の不正をあばく役割を果たしてきたわけであるが、グラスノスチ状況下ではその役割はジャーナリズムに取って替わられており、長年の「呪縛」から解き放たれた文学はいま改めていかにあるべきかを自問せざるをえなくなっている。この関連でいうならば、文化や構成を初めとする「文学性」という視点から見て質の高い多くの作品が、いまだ日本語化されずにあることも忘れてはなるまい。研究者のあいだでは、二〇世紀半ばまでのロシア文学といえば、ゴリキイやショロホフに代表されるものではとつくになく、パステルナーク、ザミャーチン、ブルガーコフ、プラトノフ、ペーリイ、アフマートヴァ、マンデリシュタム等の名がまずあげられるようになっていながらもかわらず、日本語で読めるものはあまりに少ない。また現役作家でいえば、イスカンデル、ビートフ、オクジャワその他もずっと読まれていい作家といえよう。

さて、わが国での翻訳状況はさておき、当のソ連であるが、今日の状況をロシア・ルネッサンスになぞらえる者もいることはすでに述べたとおりである。これが現状

把握にどこまで有効かはさておき、すくなくとも、昨今の動きが結果的には、過去のロシア・ルネッサンスの復元にも寄与していることは確かである。当時のロシアは右記の文学だけでなく、演劇、バレエ、美術、その他さまざまな分野で豊かな成果を生みだしていたにもかかわらず、二〇年代末よりそれらの多くは否定的なものとして隠蔽されてきた。目下その「復元作業」が進行していることになるわけであるが、注意すべきは、この「復元作業」の全体を取り仕切る明確なグループなり個人がいるわけではないということである。復活させようとする対象は異なっているものの、それらの重なり合いが結果的にロシア・ルネッサンスを再現しつつあるとみたほうが、現状にかなっているよう。すなわち、思想の場合に劣らず、ここにもさまざまな立場や嗜好が存在する。ただし、いまここでは今日の文学・芸術の特徴的な動きを個々にとりあげるのはさけ、ロシア・ルネッサンス関連で二点にだけごく手短かに触れておくことにしたい。

ひとつはイヴァノフの試みである。イヴァノフの場合もっぱら記号論的視点にもとづきながら、前記の作家たちやフレーブニコフ、マヤコフスキ、ヘオペリウ

グループの作家たち、フォルマリストたち、さらには映画のエイゼンシュテイン、心理学者のヴィゴツキ、哲学者のシペート、文学研究者のフレイデンベルグ、あるいは多面にわたって仕事を残したバフチンやフロレンスキイ等をも共通の舞台にのせることによって、文化史・精神史を復活させるとともに、その世界的同時性を明らかにしようとしており、その絵図はロシア・ルネッサンスとは必ずしも重ならない。この広さは、あるいはスラヴ派の見地からすれば抵抗のあるところかもしれない。

もうひとつは、ロシア・アヴァンギャルドとロシア・モダニズムの関係である。この点は、ソ連では目下のところ問題にすらなっていない。しかしソ連外の研究者のあいだでは、ロシア・ルネッサンスとは重なり合う後者と、ロシア・アヴァンギャルドの関係をどう見るかは、意見の分かれるところである。ちなみに、これにもまたスラヴ派と西欧派の関係を絡める見方がないわけではないが、この場合もまた、深いつながりが認められる現象もある半面、例外も多すぎる。ともあれ、ロシア・モダニズムとロシア・アヴァンギャルドの共通性と差異の確認作業がソ連国内ではじまることが、期待される。おそ

らくそれはまた、ロシア・ソ連の文化史復元の新たな段階——より普遍的で根本的な段階——への一步をしるすことにもなるであろう。

以上、ここ数年間のソ連の思想・文化状況の一端に、ごく簡単にではあるが触れてみた。冒頭にも述べたように、ソ連が今後どのように動いてゆくかは予断を許さない。経済危機にしろ民族問題にしろ、依然として見通しは暗い。この状況を耐えざる精神的支えとして教会の役割が見直されつつあるとも聞く。だが翻って文化・思想界に眼を移したとき、そういった危機的状況とはうらはらに、むしろいつその広がりと深まりをおびていきそうな気配すら感じられなくもない。この点に関してだけというならば、わたしとしては不安よりも期待のほうを秘かに抱いているというのが正直なところである。

文献表

◆ペレストロイカの社会状況一般について
『ペレストロイカを読む』和田春樹編訳、御茶の水書房、一九

八七年

『モスクワのテレビはなぜ火を噴くのか』金光不二夫、森本良夫編訳、築地書館、一九八七年

和田春樹『私の見たペレストロイカ』岩波新書、一九八七年
和田春樹『ペレストロイカ 成果と危機』岩波新書、一九九〇年

下斗米伸夫『ソ連現代政治』東京大学出版会、一九八七年（第二版、一九九〇年）

下斗米伸夫『ゴルバチョフの時代』岩波新書、一九八八年
長崎浩『世紀末の社会主義』筑摩書房、一九九〇年

溪内謙『現代社会主義を考える』岩波新書、一九八八年
菊池昌典編『社会主義と現代世界』社会主義の現実？ ソ連・中国』山川出版社、一九八九年

キエザ、メドベージェフ『証言』毎日新聞外信部訳、毎日新聞社、一九九〇年

袴田茂樹編『もっと知りたいソ連』弘文堂、一九八八年
『ロシア・ソ連を知る事典』平凡社、一九八九年

◆ペレストロイカの思想・文学状況一般について

川崎淡『いまソ連の知識人は何を考えているか』朝日新聞社、一九八九年

アフナーシエフ編『ペレストロイカの思想』和田春樹他訳、群像社、一九八九年

阿部軍治『ペレストロイカの文学』彩流社、一九九〇年
デイヴィス『ペレストロイカと歴史像の転換』富田武、下斗米

伸夫、永網憲悟訳、岩波書店、一九九〇年

シートン・ワトソン『文学作品にみるソヴェト人の息吹』奥田
央、塩川伸明訳、朝日新聞社、一九八八年

沼野充義『永遠の一駅手前』作品社、一九八九年

◆「スラヴ派」対「西欧派」その他について

サハロフ『サハロフは発言する』原卓也訳、新潮社、一九七五
年

サハロフ『進歩・平和共存および自由』川崎淡訳、みすず書房、
一九七八年

ソルジェニーツィン『クレムリンへの手紙』江川卓訳、新潮社、
一九七四年

ソルジェニーツィン『甦れ、ロシアよ』木村浩訳、日本放送出
版協会、一九九〇年

高野雅之『ロシア思想史』早稲田大学出版部、一九八九年
ヴァリツキ『ロシア社会思想とスラヴ主義』今井義夫訳、未来
社、一九七九年

ベルジャエフ『ロシア思想史（新装版）』田口貞夫訳、ペリカ
ン社、一九八二年

ブルガコフ、ストゥルルヴェ他『道標』小西善次訳、現代思潮
社、一九七〇年

谷寿美『ソロヴィヨフの哲学』理想社、一九九〇年

『ソロヴィヨフとその時代』I・II 御子柴道夫訳、刀水書房、
一九八二年

* * *

リハチョフ『ロシアからの手紙』桑野隆訳、平凡社、一九八九
年

リハチョフ『文化のエコロジー』長縄光男訳、群像社、一九
八八年

リハチョフ『庭園の詩学』坂内知子訳、平凡社、一九八七年
イワーノフ『偶数と奇数の記号論』田中ひろし訳、青木書店、
一九八八年

カガリツキー『モスクワ人民戦線』佐久間邦夫、水谷驍、湯
川順夫訳、柘植書房、一九八七年

桑野隆『バフチン』岩波書店、一九八七年

『バフチン著作集』全八巻、新時代社、一九七九―八八年
バフチン『マルクス主義と言語哲学（改訳版）』桑野隆訳、未来
社、一九八九年

バフチン『ドストエフスキイ論』新谷敬三郎訳、冬樹社、一九
八八年

バフチン『フランソワ・ラブレリーの作品と中世・ルネッサン
スの民衆文化』川端香男里訳、せりか書房、一九七三年

クラーク、ホルクイスト『ミハイール・バフチンの世界』川
端香男里、鈴木晶訳、せりか書房、一九九〇年

◆ベレストロイカに関係する主な作家たちの作品

カバコフ『ノリターン』小宮山俊平訳、新評論、一九九一年
ルイバコフ『アルバート街の子供たち』長島七穂訳、みすず書

房、一九九〇年

ルイバコフ『重い砂』北畑静子、長島七穂訳、偕成社、一九八七年

ベック『左遷』前田勇訳、群像社、一九九一年

ラスプーチン『マリヤのための金』安岡治子訳、群像社、一九八六年

ラスプーチン『生きよ、そして記憶せよ』原卓也、安岡治子訳、講談社、一九八〇年

アイトマトフ『処刑台』佐藤祥子訳、群像社、一九八八年

アイトマトフ『一世紀より長い一日』飯田規和訳、講談社、一九八四年

アスターフィエフ『魚の王様』中田甫訳、群像社、一九八三年

イスカンドール『牛山羊の星座』浦雅春訳、群像社、一九八五年

オクジャワ『シーボフの冒険』沼野充義、沼野恭子訳、群像社、一九八九年

◆「復権」した作家・作品

工藤正広『ドクトル・ジバゴ論攷』北海道大学図書刊行会、一九九〇年

パステルナーク『ドクトル・ジバゴ』上・下 新潮文庫、一九八九年

パステルナーク、フレイデンベルグ『愛と詩の手紙』江川卓、

大西祥子訳、時事通信社、一九八七年

イヴィンスカヤ『パステルナーク 詩人の愛』工藤正広、新潮社、一九八二年

『集英社ギャラリー』【世界の文学】一五 ロシアⅢ 集英社、一九九〇年（ザミャーチン『われら』、ブルガーコフ『巨匠とマルガリータ』、プラトノフ『ジャン』、マンデリシュタム『石』、その他を収録）

ブルガーコフ『犬の心臓』水野忠夫訳、河出書房新社、一九七一年

安井郁子『ペテルブルグ悲歌——アフマトワの詩的世界』中央公論社、一九八九年

武藤洋二『詩の運命——アフマトワと民衆の受難史』新樹社、一九八九年

マンデリシュタム『時のざわめき』安井郁子訳、中央公論社、一九七六年

N・マンデリシュタム『流刑の詩人・マンデリシュタム』木村浩、川崎隆司訳、新潮社、一九八〇年

『世界文学全集八二』講談社、一九七七年（ペールイ『ペテルブルグ』川端香男里訳を所収）

ヴォイノヴィチ『兵士イワン・チョンキンの華麗なる冒険』安井郁子訳、バシフィカ、一九七七年

チャヤノフ『農民ユートピア国旅行記』和田春樹、和田あき子訳、晶文社、一九八四年

ソルジェニーツィン『収容所群島』木村浩訳、新潮文庫、一九

七五年

シニャフスキー『エッセイ集』内村剛介、青山太郎訳、勁草書房、一九七〇年

グロスマン『万物は流転する……』中田甫訳、勁草書房、一九七二年

川崎淡『ソ連の地下文学』朝日選書、一九七六年

◆「復権した」芸術家

ゲルシコヴィチ『リュビモフのタガンカ劇場』中本信幸訳、

リプロボート、一九九〇年

ブローン『メイエルホリドの全体像』浦雅春訳、晶文社、一九八二年

『メイエルホリド 肅清と名誉回復』佐藤恭子訳、岩波書店、

一九九〇年

シャトロフ『ドラマソ連史』後藤洋一訳、リベルタ出版、①

一九八九年、②一九九〇年

タルコフスキー『映像のボエジア』鴻英良訳、キネマ旬報社、

一九八八年

『タルコフスキー、好き！(追悼・増補版)』イメージフォーラム

増刊号、一九八七年

ヴォルコフ『ショスタコーヴィチの証言』水野忠夫訳、中公文

庫、一九八六年

ロストロポーヴィチ、ヴィシネフスカヤ『ロシア・音楽・自由』

田中淳一訳、みすず書房、一九八七年

◆「復権」した政治家

コーエン『プハーリンとボリシェヴィキ革命』塩川伸明訳、未

來社、一九七九年

ラーリナ『夫プハーリンの思い出』上・下 和田あき子訳、岩

波書店

プハーリン『史的唯物論』佐野勝隆、石川晃弘訳、青木書店、

一九七四年

菊池昌典『トロツキー』講談社、一九八一年

トロツキー『ソ連はどこへ』藤井二行訳、窓社、一九八八年

『トロツキー自伝』Ⅰ・Ⅱ 高田爾郎訳、筑摩書房、一九八九

年

『トロツキー著作集』全二三巻、柘植書房、一九七―一八三年

トロツキー『文学と革命』Ⅰ・Ⅱ 内村剛介訳、現代思潮社、

一九六五年

上島武他『トロツキーとゴルバチョフ』窓社、一九八七年

◆ロシア・ルネッサンスとロシア・アヴァンギャルド

ピエール・パスカル『ロシア・ルネッサンス』川崎淡訳、みす

ず書房、一九八〇年

バックル『ディアギレフ』上・下 鈴木晶訳、リプロボート、

一九八四年

『ロシア・アヴァンギャルド』全八巻、国書刊行会、一九八八

年より刊行中

ポウルト編『ロシア・アヴァンギャルド芸術』川端香男里ほか

訳、岩波書店、一九八八年

バロン他『ロシア・アヴァンギャルド』五十殿利治訳、リプロ
ポート、一九八二年

水野忠夫『ロシア・アヴァンギャルド』パルコ出版、一九八五
年

マルタン『回想のロシア・アヴァンギャルド』岩本憲児、大石

雅彦、宮本峻訳、新時代社、一九八七年

イヴァノフ、ロートマン他『ロシア・アヴァンギャルドを読む』

桑野隆訳、勁草書房、一九八四年

ヴィゴツキー『ハムレット その言葉と沈黙』峯俊夫訳、国文

社、一九七〇年

ヴィゴツキー『芸術心理学』柴田義松、根津真幸訳、明治図書

一九七一年

大島幹雄『サーカスと革命』平凡社、一九九〇年

岩本憲児編『エイゼンシュテイン解説』フィルムアート社、一

九八六年

亀山郁夫『甦えるフレーブニコフ』晶文社、一九八九年

桑野隆『未完のポリフォニー』未来社、一九九〇年

『ロシア・フォルマリズム文学論集』1・2 水野忠夫編、せ

りか書房、一九七一年、一九八二年

シクロフスキー『革命のペテルブルグ』水野忠夫訳、晶文社、

一九七二年

スタイナー『ロシア・フォルマリズム』山中桂一訳、勁草書房

一九八六年

桑野隆（くわの・たかし）

一九四七年十一月二日徳島県生まれ

一九七二年東京外国語大学大学院スラヴ系言語専攻卒

現在東京大学教養学部助教授

著書『バフチン——〈対話〉そして〈解放の笑い〉』（岩波書店）、

『民衆文化の記号学——先覚者ボガトウイリョフの仕事』（東海大学

出版会）、『ソ連言語理論小史——ボードアン・ド・クルトネからロ

シア・フォルマリズムへ』（三一書房）ほか。最新刊に『未完のボ

リフォニー——バフチンとロシア・アヴァンギャルド』（未来社）

がある。

訳書『ボガトウイリョフ『民衆演劇の機能と構造』（未来社）、バフ

チン『文芸学の形式的方法』（共訳、新時代社）、『マルクス主義と

言語哲学』（未来社）、イヴァノフ他『ロシア・アヴァンギャルドを

読む』（勁草書房）、シクロフスキイ他『レーニンの言語』（三一書

房）、リハチョフ『ロシアからの手紙』（平凡社）ほか

第九回特約店・準特約店の選定を終えて

特約店委員会

昨年秋、第九回目の人文会特約店の更新をさせていただきました。この特約店制度も発足してから十七年たちましたが、選定基準は、基本的にはほとんど変わっていません。

①特約店については

①会員二十一社中十三社以上と常備契約を交わし

②会員社の人文図書を一一〇〇冊以上展示する

③年間三三〇〇冊以上販売されておられること

②準特約店については

①会員社二十一社中十社以上と常備契約を交わし

②会員社の人文図書を七七〇冊以上展示するか、または年間二二〇〇冊以上販売されておられること

以上の様なものです。

選定の結果は、別表①に記しました。

見ておわかりのように、特約店様の数が二十五店（約一八％）も増え、準特約店様が逆に三十八店（二七％）減少、準特約店から特約店にランクアップした店が三十五店もありました。

地域的に見ますと、東京都、神奈川県、それに昨秋研

別表①

	特約店	準特約店
74	188	
76	190	72
78	197	80
80	220	98
82	161	75
84	165	88
86	138	140
88	139	140
90	164	102

修旅行に行きました山陰地方を含む中国ブロックで、特約店様が増えたのが目立ち、北海道、近畿、四国地方では動きが少ないという結果が出ました。

特約店様の店数が増えたにもかかわらず、常備の展示冊数が前回と比べて軒並み減ってしまったのが非常に気になります。この原因は版元の常備セットの厳選によるものなのか、または書店様側の棚事情によるものなのか、それとも消費税がらみの出荷事情によるものなのか、いろいろ考えられるかと思えます。いずれにしましても、販売の最前線である書店様の状況が、大書店に於ても年々厳しくなっていることを我々版元の営業担当者も肌身に強く感じています。人文書のような地味なジャンル書籍

が、今後どのような販売状況に直面していくのか、しっかりと目を見開いて見守っていかねばなりません。

人文会として今回はじめて、地域別特約店数、人文書展示冊数・売上げスリッパ枚数及び占有率を出して見ました。別表②がその表でございます。

売行・傾向としては、やはり大都市、大書店に偏重化したものになっています。

この様な傾向は、今後ますます強くなると思われます。しかし、出版文化という見地から見れば、もう少しバランスの取れた形になるのが望ましいはずです。人文会としても、データをもっと深く分析する必要があると感じています。現在、数字が低い地域、書店様、そして版元も売れていく一冊一冊の重味をお互いに充分理解できるような関係を築く努力をしたいものです。

そういった意味からも、書店様、取次店様からの積極的な提言・要望をお寄せ下されば幸いです。

書店様・取次店各位のなお一層のご支援を賜わりますようお願いする次第でございます。

(晶文社 萬洲隆男)

人文会特約店準特約店一覧

北海道 ブロック	特約店	準特約店
札幌	旭屋書店札幌店	札幌 丸善札幌支店
旭川	紀伊國屋書店札幌店	旭川 三省堂書店旭川店
函館	バルコブックセンター ―富貴堂	函館 森文化堂 ブックセンターリブ 〇函館店
北海道大学学生書房	北海道大学学生書房	
クラーク店	クラーク店	
リーブルなになわ	リーブルなになわ	
東北 ブロック		
青森	成田本店	弘前 弘前大学生協
弘前	紀伊國屋書店弘前店	秋田 加賀谷書店本店
盛岡	東山堂書店	盛岡 第一書店
山形	東山堂ブックセンター	山形 さわや書店
仙台	八文字屋	仙台 山形大学生協
金港堂	金港堂ブックセンター	仙台 高山書店
八重洲書房	八重洲書房	仙台 宝文堂書店
丸善仙台支店	丸善仙台支店	東北学院大学生協
東北大学生協川内店	東北大学生協川内店	
岩瀬書店コルニエツ	岩瀬書店コルニエツ	
タヤ店	タヤ店	
東北書店	東北書店	
北関東 ブロック		
水戸	ツルヤブックセンター	水戸 茨城大学生協
川又書店駅前店	川又書店駅前店	
つくば 大学会館書籍部	つくば 大学会館書籍部	つくば 第一学群書籍部
		友朋堂書店

首都圏 (3県) ブロック		
宇都宮	新屋宇都宮店	宇都宮 ブックセンターリブ 〇筑波店
前橋	煥平堂	前橋 ブックセンターリブ
〃	ブックセンターリブ	〃
太田	ロ前橋店	太田 ナカムラヤ
浦和	須原屋	浦和 埼玉大学生協
大宮	須原屋コルソ店	大宮 押田謙文堂
新栄堂大宮店	新栄堂大宮店	大宮 大宮ブックセンター 押田
三省堂ブックポート	三省堂ブックポート	大宮店
須原屋蔵店	須原屋蔵店	所沢 芳林堂書店所沢店
芳林堂書店所沢店	芳林堂書店所沢店	〃 バルコブックセンタ
早稲田大学生協所沢店	早稲田大学生協所沢店	〃 ―新所沢店
津田沼	芳林堂書店津田沼店	市川 弘栄堂書店市川店
柏	スカイプラザ浅野	松戸 堀江良文堂書店
船橋	船橋書店船橋店	船橋 旭屋書店船橋店
〃	ブックセンターリブ	〃
千葉	ブラザ多田屋	千葉 キディランド千葉店
〃	キディランド千葉店	〃
柏	新屋柏店	柏 有隣堂伊勢佐木店
横濱	有隣堂伊勢佐木店	横濱 有隣堂西口店
〃	有隣堂東口ミネ店	〃
川崎	江崎書店向ヶ丘店	川崎 神奈川大学生協
		関東学院大学購買部

東京都市 ブロック	千代田 三省堂書店本店 書泉グランデ 岩波ブックサービス センター 旭屋書店水道橋店 丸善お茶の水店 法政大学生協市ヶ谷 店 明治大学生協本校店 八重州ブックセンター 丸善本店 旭屋書店銀座店 慶応大学生協三田店 大盛堂書店 紀伊國屋書店渋谷店 旭屋書店渋谷店 三省堂書店渋谷店 国学院大学生協	横浜 有隣堂戸塚店 ジョイナス栄松堂 そごうブックセンター 慶応大学生協日吉店 有隣堂B店 有隣堂藤沢店 ブックセンターリブ ロ藤沢店 小田原 伊勢治書店 有隣堂厚木店 厚木 千代田 東京堂本店 三省堂書店本店 書泉グランデ 岩波ブックサービス センター 旭屋書店水道橋店 丸善お茶の水店 法政大学生協市ヶ谷 店 明治大学生協本校店 八重州ブックセンター 丸善本店 旭屋書店銀座店 慶応大学生協三田店 大盛堂書店 紀伊國屋書店渋谷店 旭屋書店渋谷店 三省堂書店渋谷店 国学院大学生協	川崎 ブックセンターリブ ロ川崎店 平塚 東海大学協助会
--------------	---	---	--

東京都下 ブロック	武蔵野 弘栄堂書店吉祥寺店 パルコブックセンタ ー吉祥寺店 三鷹 第九書房	東京 東京大学生協本郷店 ブックセンターリブ ロ浅草店 目黒 東京大学生協駒場店 目黒 八雲堂 都立大学生協 世田谷 キリン堂書店バル店 紀伊國屋書店玉川高 島屋店 新宿 ブックセンターラム ラ芳進堂 早稲田大学生協文学 部店 新宿 紀伊國屋書店本店 三省堂書店新宿西口 店 芳林堂書店高田馬場 店 西武新宿ブックセン ター 早稲田大学コープブ ラザ店 明屋書店 杉並 書原杉並店 ブックセラーズ西荻 明治大学生協和泉店 豊島 旭屋書店池袋店 芳林堂書店 ブックセンターリブ ロ池袋店 江東 新栄堂書店 立教大学生協 新栄堂亀戸店 武蔵野 紀伊國屋書店吉祥寺 店 三鷹 第九書房
--------------	--	---

四国 ブロック	高松	宮脇書店	徳島	小山助学館東口店
	山口	文栄堂	山口	大学前文栄堂
中国 ブロック	広島	丸善広島支店	広島	金正堂書店 湊本積善館
	〃	紀伊國屋書店広島店	〃	〃
	〃	〃	〃	〃
	〃	丸善岡山支店	〃	〃
	〃	弘栄堂書店岡山店	〃	〃
	岡山	細護舎	〃	〃
	〃	紀伊國屋書店岡山店	〃	〃
	松江	今井書店	〃	〃
	鳥取	富士書店	〃	〃
	和歌山	宮井平安堂	〃	〃
	姫路	誠心堂書店	奈良	南部書林
	西宮	関西学院大学生協	〃	〃
	〃	海文堂	〃	〃
	〃	コーベブックス	〃	〃
	〃	店	〃	〃
	〃	ジュンク堂サンバル	〃	〃
	神戸	街店	〃	〃
	東大阪	ヒバリヤ本社	〃	〃
	〃	ジュンク堂セクター	〃	〃
	〃	店	〃	〃
	吹田	関西大学生協	豊中	大阪大学生協豊中店
	高槻	コーベブックス高槻店	東大阪	栗林書房

九州・ 沖縄 ブロック	福岡	紀伊國屋書店福岡店	徳島	森住丸善
	〃	九州大学生協(法文系店)	〃	明屋大街道店
	北九州	金栄堂	高知	愛媛大学生協
	〃	ナガリ書店	〃	高知大学生協
	久留米	エマックスたがみ	福岡	積文館
	長崎	好文堂	〃	〃
	宮崎	中央田中書店	〃	〃
	熊本	紀伊國屋書店熊本店	〃	〃
	〃	ブックスまるぶん	〃	〃
	大分	本町見屋堂	〃	〃
	鹿兒島	坂口金海堂	〃	〃
	〃	鹿兒島大学生協	〃	〃
	那覇	球陽堂書房	西原	琉球大学生協
	〃	〃	〃	〃

別表2 特約店、人文書展示冊数・売上スリップ枚数及び占有率 (1990.8/調査：年間集計)

* A=特約店 B=準特約店

地区名	A	B		展示・売上	占有率	地区名	A	B		展示・売上	占有率
神奈川県	12	5	人常 人売	32,750 122,777	6.57% 6.53	札幌市	5	1	人常 人売	12,426 39,694	2.49% 2.11%
首都圏3県	21	16	人常 人売	62,618 182,033	12.56% 9.68%	その他	2	3	人常 人売	5,103 11,339	1.02% 0.60%
千代田区	8	2	人常 人売	27,397 141,700	5.49% 7.54%	北海道計	7	4	人常 人売	17,529 51,003	3.51% 2.71%
中央区	3	1	人常 人売	15,995 91,205	3.21% 4.85%	青森県	2	1	人常 人売	4,520 8,766	0.91% 0.47%
港区	1	0	人常 人売	2,749 21,693	0.55% 1.15%	秋田県	0	2	人常 人売	1,543 7,025	0.31% 0.37%
渋谷区	5	1	人常 人売	15,034 69,131	3.01% 3.68%	岩手県	2	2	人常 人売	5,011 8,699	1.00% 0.46%
目黒区	1	2	人常 人売	4,088 27,935	0.82% 1.49%	山形県	1	1	人常 人売	2,272 7,963	0.46% 0.42%
世田谷区	0	2	人常 人売	3,727 36,226	0.75% 1.93%	宮城県	5	3	人常 人売	12,942 41,125	2.60% 2.19%
新宿区	5	2	人常 人売	19,344 128,093	3.88% 6.81%	福島県	2	0	人常 人売	3,288 4,217	0.66% 0.22%
杉並区	3	2	人常 人売	8,052 18,705	1.61% 0.99%	東北6県計	12	9	人常 人売	29,567 77,795	5.93% 4.14%
豊島区	3	3	人常 人売	17,914 76,019	3.59% 4.04%	茨城県	3	4	人常 人売	11,621 25,100	2.33% 1.33%
その他	3	1	人常 人売	10,255 36,183	2.06% 1.92%	栃木県	1	1	人常 人売	3,850 5,980	0.77% 0.32%
東京都23区	32	16	人常 人売	124,555 646,890	24.98% 34.40%	群馬県	3	0	人常 人売	4,358 13,335	0.87% 0.71%
武蔵野地区	2	2	人常 人売	7,249 20,669	1.45% 1.10%	北関東3県	7	5	人常 人売	19,829 44,415	3.98% 2.36%
立川地区	2	3	人常 人売	7,248 25,384	1.45% 1.35%	埼玉県	3	8	人常 人売	15,642 27,411	3.14% 1.46%
八王子地区	5	1	人常 人売	10,938 35,349	2.19% 1.88%	千葉県	6	3	人常 人売	14,226 31,845	2.85% 1.69%
東京都下	9	6	人常 人売	25,435 81,402	5.10% 4.33%	横浜市	7	2	人常 人売	17,581 89,096	3.53% 4.74%
東京都計	41	22	人常 人売	149,990 728,292	30.08% 38.73%	川崎市	1	2	人常 人売	3,396 6,011	0.68% 0.32%
静岡県	4	3	人常 人売	10,642 31,357	2.13% 1.67%	その他	4	1	人常 人売	11,773 27,670	2.36% 1.47%

地 区 名	A	B		展 示 ・ 売 上	占 有 率
神戸市	4	0	人常 人売	15,862 46,025	3.18% 2.45%
その他	2	1	人常 人売	2,863 11,564	0.57% 0.62%
兵庫県	6	1	人常 人売	18,725 57,589	3.75% 3.06%
奈良県	0	1	人常 人売	2,058 891	0.41% 0.05%
和歌山県	1	0	人常 人売	2,179 3,262	0.44% 0.17%
近畿 2 府 4 県計	24	11	人常 人売	84,134 360,625	16.87% 19.18%
鳥取県	1	1	人常 人売	2,349 4,170	0.47% 0.22%
島根県	2	0	人常 人売	3,213 9,190	0.64% 0.49%
岡山県	4	0	人常 人売	5,707 14,611	1.14% 0.78%
広島市	3	2	人常 人売	8,241 32,668	1.65% 1.74%
その他	0	0	人常 人売	92 1,148	0.02% 0.06%
広島県	3	2	人常 人売	8,333 33,816	1.67% 1.80%
山口県	1	1	人常 人売	2,498 5,534	0.50% 0.29%
中国 5 県計	11	4	人常 人売	22,100 67,321	4.43% 3.58%
香川県	1	0	人常 人売	2,531 10,172	0.51% 0.54%
徳島県	0	2	人常 人売	1,994 2,870	0.40% 0.15%
愛媛県	2	2	人常 人売	4,688 13,537	0.94% 0.72%
高知県	1	1	人常 人売	2,222 8,300	0.45% 0.44%
四国 4 県計	4	5	人常 人売	11,435 34,879	2.29% 1.86%
福岡市	3	1	人常 人売	8,688 36,257	1.74% 1.93%

地 区 名	A	B		展 示 ・ 売 上	占 有 率
名古屋市	9	1	人常 人売	23,580 90,448	4.73% 4.81%
その他	1	3	人常 人売	5,072 15,004	1.02% 0.80%
愛知県	10	4	人常 人売	28,652 105,452	5.75% 5.61%
岐阜県	2	0	人常 人売	4,155 10,650	0.83% 0.57%
三重県	1	2	人常 人売	3,374 10,989	0.68% 0.58%
東海 4 県計	17	9	人常 人売	46,823 158,448	9.39% 8.43%
山梨県	0	1	人常 人売	817 606	0.16% 0.03%
長野県	1	2	人常 人売	5,506 17,299	1.10% 0.92%
新潟県	2	2	人常 人売	4,896 19,293	0.98% 1.03%
富山県	1	2	人常 人売	2,750 11,028	0.55% 0.59%
石川県	3	2	人常 人売	7,579 32,929	1.52% 1.75%
福井県	1	1	人常 人売	2,111 4,307	0.42% 0.23%
北陸甲信越 計	8	10	人常 人売	23,659 85,462	4.74% 4.55%
京都市	8	3	人常 人売	26,424 99,703	5.30% 5.30%
その他	0	1	人常 人売	956 2,109	0.19% 0.11%
京都府	8	4	人常 人売	27,380 101,812	5.49% 5.41%
滋賀県	0	0	人常 人売	816 1,438	0.16% 0.08%
大阪市	6	3	人常 人売	26,658 171,897	5.35% 9.14%
その他	3	2	人常 人売	6,318 23,736	1.27% 1.26%
大阪府	9	5	人常 人売	32,976 195,633	6.61% 10.40%

地 区 名	A	B		展 示 ・ 売 上	占 有 率
北九州市	2	1	人常	4,566	0.92%
			人売	11,193	0.60%
その他	1	0	人常	914	0.18%
			人売	2,530	0.13%
福岡県	6	2	人常	14,168	2.84%
			人売	49,980	2.66%
佐賀県	0	0	人常	452	0.09%
			人売	1,171	0.06%
長崎県	1	0	人常	1,490	0.30%
			人売	7,181	0.38%
宮崎県	1	0	人常	929	0.19%
			人売	3,065	0.16%
熊本県	2	1	人常	3,798	0.76%
			人売	9,489	0.50%
大分県	1	1	人常	3,460	0.69%
			人売	4,097	0.22%
鹿児島県	2	1	人常	3,572	0.72%
			人売	8,679	0.46%
沖縄県	1	1	人常	3,076	0.62%
			人売	6,304	0.34%
九州沖縄計	14	6	人常	31,028	6.22%
			人売	89,966	4.78%
全国計	166	101	人常	498,712	100.00%
			人売	1,880,269	100.00%

弘報委員会より

○湾岸戦争・バルト三国問題——変革と激動の嵐が吹き荒れています。このような時こそ「人文書」の秘められた力が発揮されるのです。つねに原点をふまえてこそ、正しい視点がえられると思います。さらなる販売への取組みをお願い申し上げます。

○昨年十月におこないました「山陰研修旅行」は、実りあるものでした。各書店さんからのご提言やご要望は、今後の会活動および会員社の営業活動に積極的に取り入れていきたいと思っています。ご訪問いたしました書店様、そして関係者の方方に厚く御礼申し上げます。

○小会では、二年に一度特約店・準特約店の改定をおこなっております。詳しい報告を今号に掲載いたしましたのでご覧下さい。改定作業をおこなうことにより貴重なデータを得ることができました。これらのデータを活用するのも小会の任だと思っています。

○特約店・準特約店さんに毎月お送りいたしておりました「人文会ワンポイント情報」の衣替えをおこないます。永い間ご愛顧いただきまして有り難うございました。「ワンポイント情報」は、「人文会出版情報 試読室」となります。ご期待下さい。

一九九〇年 人文会各社の受賞図書一覧（アイウエオ順）

- ・アジア・太平洋賞
- ・前田成文著『東南アジアの組織原理』（勤草書房）
- ・赤木政著『タイの政治文化』（勤草書房）
- ・油井大三郎著『未完の占領改革 新しい世界史II』（東京大学出版会）
- ・NIRA政策研究・東畑記念賞
- ・鶴見和子・川田侃編『内発的發展論』（東京大学出版会）
- ・大佛次郎賞
- ・宮下志明著『本の都市リヨン』（品文社）
- ・中村喜和著『聖なるロシアを求めて』（平凡社）
- ・カナダ首相出版賞
- ・加藤普章著『多元国家カナダの実験』（未来社）
- ・ビエール・トルドー著／加藤普章・田中浩訳『連邦主義の思想と構造』（御茶の水書房）
- ・木村伊兵衛賞
- ・星野道夫著『写真集「グリーズリー」「ムース」』（平凡社）
- ・小泉八雲賞
- ・河竹登志夫著『歌舞伎美論』（東京大学出版会）
- ・今和次郎賞
- ・松平誠著『都市祝祭の社会学』（有斐閣）
- ・サントリー学芸賞
- ・西村清和著『遊びの現象学』（勤草書房）
- ・洪沢クロード賞
- ・P・シャンジュニ著『ニューロ人間（みすず書房）』
- ・辻村みよ子著『フランス革命の憲法原理』（日本評論社）
- ・新潮学芸賞
- ・鶴見良行著『ナマコの眼』（筑摩書房）
- ・土門拳賞
- ・宮崎学著『写真集「フクロウ」』（平凡社）
- ・日経経済図書文化賞

- ・本多佑三著『計量経済学における大標本検定』（神戸経営学双書）
- ・（有斐閣）
- ・日本エッセイストクラブ賞
- ・和宮正之著『私の中のシャトル』（筑摩書房）
- ・日本翻訳文化賞、日本翻訳出版文化賞
- ・イブセン著／原千代海訳『イブセン戯曲全集』（全五巻）（未来社）
- ・ブッダゴッサ著／村上真完・及川真介訳『仏のことば註』（全四巻別巻）（春秋社）
- ・『西洋思想大事典』全五巻（平凡社）
- ・J・スウィフト著／中野好之・海保真夫訳『スウィフト政治・宗教論集』（法政大学出版局）
- ・G・ウィーコ著／福鏞忠恕訳『ウィーコ自叙伝』（法政大学出版局）
- ・L・シュタイン著／石川三義他訳『平等原理と社会主義』（法政大学出版局）
- ・ヴォルテール著／安斉和雄訳『歴史哲学——「諸国民の風俗と精神について」予論』（法政大学出版局）
- ・ノーベル文学賞（オクタビオ・パス受賞）
- ・高山智博・熊谷明子訳『孤独の迷宮——メキシコの文化と歴史』（法政大学出版局）
- ・鼓直・木村栄一訳『クロード・レヴィ・ストロース（原書改訂版）』（法政大学出版局）
- ・毎日出版文化賞
- ・石田雄著『日本の政治と言葉 上・下』（東京大学出版会）
- ・南日本出版文化賞
- ・下野敏見著『東シナ海文化圏の民俗』（未来社）
- ・柳田国男賞
- ・田辺悟著『日本蠻人伝統の研究』（法政大学出版局）
- ・読売文学賞
- ・高井有一著『夜の蟻』（筑摩書房）
- ・和辻哲郎文化賞
- ・宇佐美斉著『落日論』（筑摩書房）

人文会会員名簿

(〒111 台東区蔵前 2-6-4 筑摩書房内)

1991. 2. 現在

	社 名	担当者	〒	所 在 地	電 話	FAX
	青 木 書 店	古川 清	162	新宿区早稲田鶴巻町 538	3202-3999	3204-1187
	大 月 書 店	原田 敦雄	113	文京区本郷 2-11-9	3813-4651	3813-4656
	御茶の水書房	平石 修	113	文京区本郷 5-30-20	5684-0751	5684-0753
	紀伊國屋書店出版部	佐久間健雄	156	世田谷区桜丘 5-38-1	3439-0128	3439-3955
	勁 草 書 房	氏家 富男	112	文京区後楽 2-23-15	3814-6861	3814-6854
	社 会 思 想 社	渡辺 和彦	113	文京区本郷 3-25-13		
				中銀本郷 3 丁目ビル	3813-8105	3813-9061
	春 秋 社	澤畑 吉和	101	千代田区外神田 2-18-6	3255-9611	3253-1384
幹 事	晶 文 社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田 2-1-12	3255-4501	3255-4506
幹 事	誠 信 書 房	濱地 正恵	112	文京区大塚 3-20-6	3946-5666	3945-8880
	創 元 社	重光 義彦	162	新宿区山吹町 334-11	3269-1051	3269-1092
代表幹事	筑 摩 書 房	菊池 明郎	111	台東区蔵前 2-6-4	5687-2680	5687-2685
	東京大学出版会	竹内 康一	113	文京区本郷 7-3-1		
				東京大学構内	3811-8814	3812-6958
	日 本 評 論 社	菅田 誠	170	豊島区南大塚 3-10-10	3987-8621	3987-8590
幹 事	福 村 出 版	土屋知可夫	112	文京区小石川 1-3-17	3813-3981	3818-2786
幹 事	平 凡 社	須田 康昭	102	千代田区三番町 5 K ビル	3265-0455	3263-9333
	法政大学出版局	市川 昭夫	102	千代田区富士見 2-17-1		
				法政大学構内	3237-1731	3237-8899
会 長	み す ず 書 房	相田 良雄	113	文京区本郷 5-32-21	3814-0131	3818-6435
	〃	持谷 寿夫	〃	〃	3814-0131	3818-6435
	未 来 社	西谷 能英	112	文京区小石川 3-7-2	3814-5521	3814-8600
幹 事	雄 山 閣 出 版	武 一雄	102	千代田区富士見 2-6-9	3262-3231	3262-6938
幹 事	有 斐 閣	辻村 清隆	101	千代田区神田神保町 2-17	3265-6811	3262-8035
	吉 川 弘 文 館	阿部 昇	113	文京区本郷 7-2-8	3813-9151	3812-3544

販売企画委員会 ◎辻村 ○重光 古川 氏家 竹内 阿部

弘 報 委 員 会 ◎土屋 ○平石 原田 佐久間 西谷

調査・研修委員会 ◎濱地 ○澤畑 渡辺 菅田

特 約 店 委 員 会 ◎萬洲 ○市川 持谷

これまでの「常識」の鮮やかな逆転

異説歴史事典

G・プラウゼ／森川俊夫訳 誰もが信じて疑わなかった歴史上のこれまでの常識を逆転させた、誰が読んでも楽しい読物。■一七〇〇円(税込)

激動の90年代に鋭敏な見取図を提示

透きとおった悪

J・ボードリヤール／塚原史訳 消費社会論の第一人者が、東欧の激動からエイズまで今日の事象を論じて「世紀末」を読む■一八〇〇円(税込)

紀伊國屋書店

出版部：東京都世田谷区桜丘5-38-1

☎ 03(3439)0128 (営業)

唯一の道を歩む悲劇の思想家の全貌

河合榮治郎全集

■内容案内呈
復刊限定
全24巻
同時発売

昭和初年、マルキシズムの台頭にひとり自由主義の旗を掲げてたたかい、やがて軍部がはびこり、右翼勢力がこれにとつて変るや、ファシズムと真正面から対決した自由・理想主義思想家の全貌。主義に対しては少しのごまかしも妥協もゆるさず、信念に生き信念に死したその生涯は現代人に覚醒と反省を促すことだろう。

■A5判面入／平均四〇〇頁／月報合本

記念特別価格・揃価一四四、〇〇〇円

(91年七月末日締切。八月一日以降は定価一五三、六〇〇円)

河合榮治郎生誕100年記念＊復刊＊全巻同時発売

(定価は税込)

社会思想社

Tel 03-3813-8105

小澤征爾 大研究

オザワ・ブームはどこから来たのか？ あらゆる角度から初めて解明される“世界の小澤”のすべて。
〈執筆〉沢木耕太郎他23氏。2200円

ウィーンの モーツァルト

■丸山桂介 モーツァルトがつき動かされていた創造理念の秘密を同時代精神史の文脈の中に読み解き、究明した画期的論考。1900円

▶ 定価は消費税込み

東京都千代田区 春秋社 ☎(03)255-9611
外神田2-18-6 振替東京8-24861

石堂清倫

続 わが異端の昭和史

社会主義思想に誠実に生きた一知識人の波乱の戦後史。2575円〒310

N.ルーマン／馬場・上村訳

目的概念とシステム合理性

社会システムにおける目的の機能について 4120円〒310

有馬道子

心のかたち・文化のかたち

解釈の三類型から言語・文化・パーソナリティを考察。2266円〒260

織田元子

システム論とフェミニズム

女性問題に関わる概念の混乱をシステム論によって正す。2163円〒260

* 定価は税込／振替東京5-175253

東京文京 勁草書房 電話(03)
後楽2-23 3814-6861

「知の再発見」双書

フランス・ガリマール社と提携
世界13カ国で出版

マホメット

五十嵐一監修 アラブ世界の基本原
理であるイスラム教の成立と展開を、
預言者マホメットの生涯を通して解
説。
13000円(税込)

マヤ文明

失われた都
市を求めて

落合一泰監修 未解明の巨大ピラミ
ッドや象形文字を擁する偉大な文明。
探検史と研究史の流れを立体的に描
く。
13000円(税込)

創元社

大阪市北区西天満1-4-2
東京都新宿区山吹町334-11

浪費の政治学

商品としてのスタイル

S・ユウウェン 平野・中江 訳 かぎ
りない欲望と消費の迷路、現代社会。
その本質を、個人生活から世界政治ま
でを支配する「スタイル」を切り口に鮮
やかに読み解く。
3600円

壊れたヨーロッパ

クルツィオ・マラルパテ 古賀弘人訳
ナチスとともに進軍し、戦いの傷跡を
なめつくした戦時特派員が、穢され、
腐ったヨーロッパを描き出す。全世界
を震撼させた20世紀の黙示録。
4500円

晶文社

東京都千代田区外神田2-1-12
電話(3255)4501

女性の セルフ・フィットネス

自分らしさと心の調和

中村延江著 現代女性のさまざまな
なストレスを解消し、快適で充実
した状態を実現する。
2100円

構造こわし

組織変革の心理学

古川久敬著 組織が硬直から脱却
して革新を実現するための「構造
こわし」理論を提唱する。
2300円

〈税込表示〉

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6
TEL. 03-3946-5666

ある神経病者の回想録

D.P. シュレーバー 渡辺哲夫訳

前世紀末の一知識人が書き残した精神病者の内的世
界。フロイトが分析し、ラカンの精神病論の基底と
なった古典的ドキュメント。
5360円

命題コレクション 哲学

坂部 恵編
加藤尚武編

ヘラクレイトスからデリダまで、51人の哲学者の基
本命題を全体的コンテクストの中で生かす。
2470円

筑摩書房

〒111 台東区蔵前2-6-4
☎03(5687)2680(価格は税込)

石井 進

B5判／二八八四円(税込)

中世を読み解く 古文書入門

「古文書を読む」とは、中世史研究の出発点であると同時に目標の一つである。つまり「中世」理解は古文書の世界を通してこそ得られるものだともいえる。本書は、古文書の現物をていねいに読み進めながら、中世社会の知られざる姿を生き生きと再現していく好著。

百瀬 宏編

四六判／三三六九円(税込)

ヨーロッパ小国の国際政治

東京大学出版会

■最新刊■

久世敏雄編

変貌する社会と青年の心理

激動する社会の諸相と、そのもとで形成され変化してきた現代青年の心理的特徴の関連性を多面的に分析する。

岡堂哲雄編

非行の心理臨床

講座心理臨床の実際③ 6つの代表的心理療法による非行少年へのアプローチを、理論と事例の双方から記述。

東京・文京
小石川1-3

福村出版
定価は税込

電話 (03)
3813-3981

世界宗教大事典

監修 山折哲雄

仏教、キリスト教をはじめ、世界のあらゆる宗教を網羅した、日本で初めての総合的宗教事典。民間信仰や俗信、オカルティズムなどにも目配りし、現代人の関心に的確に応える。

●特別定価19,500円(税込'91年6月末まで)

●定価23,000円(税込)

平凡社 〒102 東京都千代田区三番町5
☎03-3265-0455

この絵本は、アルツハイマー病にかかった老人と孫の、あたたかい交流をえがいたものです

わすれないよ おじいちゃん

文/ドナ・ガスリ
絵/ケイティ・アーンステイン

定価1200円
(税込)

家族が、社会が、ばけのおとしよりをいかに支えるべきかを孫娘の目を通して語ることができる

〒170 東京都豊島区南大塚3-10-10
☎03-33987186(1代)



日本評論社

法政大学出版局

■ H. P. デュル ■

裸体と はじらいの 文化史

文明化の過程の神話 I

裸体や性、排泄などにかかわる羞恥を文明化の産物とするエリアスの理論に真っ向から挑む問題の書、世界史におけるありとあらゆる裸体を検証し、羞恥を時代・社会を超えて普遍的な人間の本性として位置づける
藤代幸一・三谷尚子訳/税込4429円

102東京都千代田区富士見2 ☎3237-1731

江戸ツ子の生活◎生活史叢書③
芳賀登著 ●2800円

海の民俗◎日本の民俗学シリーズ⑨
田村勇著 ●2200円

木と民具◎素材としての木と民具のかかわり
日本民具学会編 ●4200円

巨匠との対話昭和の陶芸◎
杉浦澄子著 ●3500円

日本旧石器時代史◎考古学選書③
岡村道雄著 ●3200円

雄山閣 *価格は税込

千代田区富士見2/振替東京3-1685



有斐閣 出版案内
(定価は税込み)
東京・神田・神保町/TEL 03-3265-6811

好評のシリーズ
《いま、家族を問う》

発売中
好評
エイジレス・ライフ
一三六〇円 (ほか、既刊4点)

結婚・離婚 女の居場所

目黒依子著
四六判力バ1付
定価一四四二円

若い人の間では依然として結婚願望が強いものの、ここ三〇年の間に女性の生き方は変わった。破局に至らないまでも夫と妻の関係が希薄な家庭が多い。「離婚時代」に問われる男と女の自立に焦点を当て、真の女の居場所をさぐる。

朴慶南著

ゆめよ

クミンヨ!

— キョンナムさんと語る

定価1545円

在日韓国・朝鮮人二世のひとりの女性がヘラジオたんぽをを通して語った。自分を生きたい。思いはリスナーたちの心に深く届き日本と朝鮮の歴史的関わりに目を向けさせた。若者たちの手紙と著者のメッセージで綴る対話。

未来社

東京都文京区小石川3-7-2
電話(03)3814 5521 千112

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印